



TITLE:

マムルーク朝時代15世紀末の一史書の成立過程について: 'Add al-Bsāit al-hanafi のイスラム暦848年/西暦1444年4月20日から1445年4月8日の叙述の検討を通じて

AUTHOR(S):

菊池, 忠純

CITATION:

菊池, 忠純. マムルーク朝時代15世紀末の一史書の成立過程について: 'Add al-Bsāit al-hanafi のイスラム暦848年/西暦1444年4月20日から1445年4月8日の叙述の検討を通じて. 東洋史研究 2000, 59(3): 525-572

ISSUE DATE:

2000-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155357>

RIGHT:

マムルーク朝時代15世紀末の 一史書の成立過程について

——‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī のイスラム暦848年/西暦1444年
4月20日から1445年4月8日の敘述の検討を通じて——

菊 池 忠 純

- 一 は じ め に
- 二 著者と著作と ar-Rawḍ の敘述の成立過程の検討方法
- 三 ar-Rawḍ の著作の目的と敘述方法
- 四の一年代記情報
- 四の二 傳記情報
- 五 お わ り に

一 は じ め に

中世の西アジア史研究においてマムルーク朝時代は他の時代に比べて史料が多く残っていることからさまざまな分析がなされてきた。しかし一方では史料批判の視角や寫本間の異同を明らかに示していないなど、これまでの刊行史料の缺點が指摘されてきた。しかし現在では、刊行された史料の幾つかについては、再校訂の試みが進行中である。また概要のみが紹介されてきた史料あるいは寫本でのみ言及されてきた史料が刊行されており、史料系統をはじめとしたさまざまな研究を行う客観的状況が整備されつつある。また一方では残存しているワクフ文書などが後期に集中しているので、それらを歴史の流れのなかに有機的に位置づけるために後期の社會についてのより詳細な情報が必要と考える。

本稿では、マムルーク朝時代の代表的な歴史家である al-Maqrizī (1363—1442 年), al-‘Aynī (1361—1451年), Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī (1372—1449年), Ibn Taghribirdī (1409/10—1470年), Ibn Dāwūd aṣ-Ṣayrafī (1412—1495年), as-

Sakhāwī (1427—1497年), また Ibn Iyās (1448—1542年) とほぼ同時代人であり, 歴史と傳記集を著述したアブドル＝バースィト・アル＝ハナフィー ‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī (844—920/1440—1514年) をとりあげる。

彼のイスラム暦9世紀の半ばから後半／西暦15世紀の半ばを対象とする歴史書 ar-Rawḍ のイスラム暦848年の記述の成立過程を, その過程を如實に示する寫本の彼の書き込み部分と對照することで検討する。それによって同時代史料を彼はどう利用したのかを明らかにしたい。また彼の史書にある情報が後代にどのように繼承されたかを示し, その著作の評価と特徴を探ることにする。

二 著者と著作と ar-Rawḍ の敘述の成立過程の検討方法

著者の父 Ghars ad-Dīn Khalīl b. Shāhīn az-Zāhirī (813—873/1410—1468年) は⁽¹⁾, Zubdat Kashf al-Mamālik を著した人物である。イブン・イヤースによるとマムルークの子孫 (awlād an-nās) では破格の経歴という生涯を送り, また本稿で関連することではハディース學についてイブン・ハジャールからイジャーザを得たと言われている。息子 ‘Abd al-Bāsiṭ b. Khalīl b. Shāhīn は父がナーイブとして赴任していた小アジアのマラティーヤで844年に生まれ, 父の赴任や巡禮に同行してタラープルス, ダマスカス, アル＝ヒジャーズ, カイロと各地を移った。また28歳のときマグリブとアンダルスへ醫學修行のために旅だった (866—871/1462—1467年)⁽²⁾。その後カイロに居住して當時の知識人と交際し官廷にも出入りした。彼にはハナフィー派法學, 醫學, 歴史の著作があり920/1514年にカイロで没した。

(1) この人物の生涯については, ar-Rawḍ の彼の没年873年の記事を他の史料と比較して検討した。拙稿「我が父ハリール・ブス・シャーヒーーン—‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī の記述の比較研究」『西南アジア研究』No. 47 (1997), pp. 53-73.

(2) 彼のマグリブとアンダルスの旅については ar-Rawḍ の中から該當部分を校訂譯出した研究 Brunschvig, R. (1936) と Levi Della Vida (1933) がある。その旅行記としての性格に注目した下記の諸研究のなかでこの著者について簡単に觸れられている。Ḥasan, Zakī Muḥammad, *ar-Rahhālāt al-Muslimūn fi-l-‘Uṣūr al-Wuṣṭā*, al-Qāhira, 1945. Kratchkovskiy, I. Y., *Arabskaya geograficheskaya literatura, Izbrannyye Sochineniya*, T. IV, Moskva-Leningrad, 1957. (transl. by Hāshim, ‘Uthmān; *Tārīkh al-Adab al-Jughrafī al-‘Arabī*, 2nd ed., Bayrūt, 1987.). Khamīda, ‘Abd ar-Raḥmān, *A’lām al-Jughrafīn al-‘Arab*, Dimashq, 1416/1995. (1st ed. 1984).

本稿で主に検討するのは歴史書 *ar-Rawḍ al-Bāsim fī Ḥawādith al-‘Umr wat-Tarājim* であり、この著作は、二巻の寫本としてヴァチカン圖書館に所蔵されている (Vatican Arabo, 728, 729)。この寫本の寫眞版はエジプトの國立圖書館 (Dār al-Kutub al-Miṣriya) に所蔵されている (2403 *tārīkh Taymūr*)。ヴァチカン圖書館所蔵の寫本はその製本時に全體の内容を検討せずに葉數が記されていて、年記順になっていない。一方カイロの國立圖書館所蔵のコピーはそれを年記順に並び替えてあらたに葉數を付け直している⁽³⁾。またこの二巻の寫本は、この歴史書のうち844—874/1440—1469/70年の30年間分であるが、それぞれ844/1440年から850/1446—7年の部分と865/1460—1年から874/1469—70年の部分に過ぎない⁽⁴⁾。彼は、1年を敘述する方法として、年代記部分とその年に亡くなった人物を中心とする傳記部分という2つの部分で構成するが、前者の寫本で様式的に整っているのは一年分のみであり、前者と後者の間850—64年の14年間の部分は現在迄のところ發見されていない。また後者についても一部缺けている⁽⁵⁾。現在迄のところこの著作はこの寫本のみが知られている。執筆の時期については、887年から890年頃に推定される⁽⁶⁾。

(3) 何人かのアラブ人研究者は 2403 *tārīkh Taymūr* を Vatican Arabo, 728 として引用しているが、それは Vatican Arabo, 728 を1冊そして Vatican Arabo, 729 を三冊に製本した四冊本である。また Vatican Arabo, 728 を年記順に fol. 1a—fol. 19b の次に fol. 48a—fol. 66a (Vatican Arabo, 728 の末尾) そして fol. 20a—47b (fol. 39b と fol. 40a の間には脱落部分がある) の順に並び替えている。内容を検討して拙稿もこの並べ方に従う。しかし葉數は Vatican Arabo, 728 のまま引用する。

(4) Vatican Arabo, 728. f. 48b には、ある人物について述べた記事の中で、「私が本書を書き始めた(8)87年に死んだ、彼のことは後で述べる」と記されていることから彼の歴史書は、少なくとも887年までは書かれていたと考えられる。

(5) Vatican Arabo, 728 は、844年の年代記と傳記部分の一部、そして845年の年代記の一部と傳記部分、次に846年の年代記の一部、848年の年代記と傳記部分、849年の年代記と傳記部分の一部、850年の年代記と傳記部分の一部である。一方 Vatican Arabo, 729 は874年の傳記部分で終わっているが、Yashbak min Ḥaydar al-Ashrafi と最後の歴史家 Yūsuf b. Taghrī Birdī の傳記の間に少なくとも一葉が脱落している。

また, Levi Della Vida (1933) また ‘Izz ad-Dīn (1990) はこの二つの寫本を著作者自筆本とするが敘述内容と本文の間違いを検討して、私としては少なくとも Vatican Arabo, 728 については自筆本でないと考えている。

(6) 執筆の開始時期は前記注(4)参照、また攔筆時期については Vatican Arabo, 729 の最終葉 f. 260a には「第2巻」の部分は赤字で書かれており不明瞭であるが「第2巻の執筆は890年 Rabi’ I 月18日月曜日に終えた。」と読むことができる。しかしその後にある895年と書いてある部分の意味は不明である。(Brunschvig, R. (1936) p. 10

本稿ではこの寫本を補うものとして彼のそれぞれ一つの寫本のみ傳わっている二つの著書と彼自身の書き込み部分を持つ別人の著作を利用する。

先ず, ‘Abd al-Bāsiṭ: Nayl al-Amal fī Dhayl ad-Duwal, Bodleian Library, MS. Hunt. 285, 610 (Uri Arab. Moh. 802, 812. Nicoll. p. 596) という二巻の寫本である。この書物は adh-Dhahabī (748/1348年没) の Duwal al-Islām (744年までの歴史書) の續編 (Dhayl) として書いたもので, 744/1343年から896/1490年迄の歴史書である。上記著作 ar-Rawḍ の100年前から始まり, その要約版ともいえるものである⁽⁷⁾。この著作の各所に, 詳しくは ar-Rawḍ に述べたとあることから執筆時期が推定される。

次に, ‘Abd al-Bāsiṭ; Majma‘ al-Mufannan bi-l-Mu‘jam al-Mu‘anwan, Maktabat Baladiyat al-Iskandariya, 4448/800b, musalsal 5 tārikh. は一冊の寫本であるが, これは彼の大部な人名録の一部である。著者は, 序文部分で844年から889年の執筆時迄に没した人物を対象としており, ar-Rawḍ に付け加える著作であると述べている。903年に初稿が完成したと考えられるが, 残念ながらこの寫本はアルファベットのアルフからジームまでわずかに五文字で始まる人物しか扱っていないが総人名数は1188名に上る⁽⁸⁾。

次に彼自身の書き込みのある寫本とは Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī; Inbā’ al-Ghumr bi-Anbā’ al-‘Umr, Topkapı Sarayı Müzesi kütüphanesi, III Ahmet,

は895年の部分については述べていない。)

- (7) 第1巻は, 355葉からなり, 744/1343年から839/1435年迄を含み, 第2巻は, 380葉からなり, 840/1436年から896/1490年迄を扱っている。Brunschvig, R. (1936). p. 10 の895年までは間違い。また Martel-Thoumian, B. (1991) p. 21 は896年までと正確に記している。

またこの著作の敘述形式は, ar-Rawḍ のように年代記部分があり次に同年に没した人物の傳記部分が續くという形式ではなく, 年代順に年, 月順に書いている。日と曜日については原則として記されていない。また人名についても ar-Rawḍ や後述の Majma‘ のように實名 (イスマ) が最初にくるのでなく通り名 (シュフラ), 尊稱 (ラカブ) そして實名の順に述べられている。

- (8) この寫本は269葉からなる。表紙部分に Muḥammad Murtaḍā al-Ḥusaynī, すなわち Taj al-‘Arūs を著した az-Zabīdī (1206/1791年没) の名前が見られることから彼の舊藏本と思われる。執筆開始は889年 Jumādā I 月初め/1484年であると述べているが, 摺筆時期については, fol. 134b に, ある人物の没年を記した部分で, 「彼は疫病のためタラープルスで903年 Jumādā I 月初旬すなわちこの歴史書を書き終えて暫くして亡くなった」とあることから一應903年に初稿が完成したと考えられる。所収の傳記情報の数について ‘Izz ad-Dīn (1990) は1104名と述べている。

2941/2. である。すなわち有名なイブン・ハジャール・アル＝アスカラーニーの年代記である。この寫本の第一巻にあたる III Ahmet, 2941/1 の餘白の書き込み部分については一部はダマスカスで刊行された校訂本 (Inbā' (D)) の注に引用されているがその経緯や内容については詳しく検討されていない。トプカプ図書館の目録によると、この寫本は849年迄の歴史書で、880/1475年に書かれたものであるとされている⁽⁹⁾。しかし實見すると、ハイデラバード版 (Inbā' (H)) また最近完結したカイロ版 (Inbā' (C)) の校訂本⁽¹⁰⁾は共に、850年の年代記部分の一月 Muḥarram 月で終わっているが、この寫本の最終葉198aは、上記の2種の校訂本の終わりに續けて3行にわたり同年 Rabi' I 月12日月曜日の1件の年代記情報を附加して結びの文章が記載されている。そして次に同年に没した5名の人物の傳記が記され、次に再び表現は少し違うが、同じく結びの文章、それに第2巻目の終了という文言が来て、886年 Rabi' II 月6日火曜日の年期が明記されて終わっている。すなわち著者イブン・ハジャール没後34年の日附である。またこの寫本は、本文の餘白部分に数多くの書き込みがみられる。書き込みは、末尾に 'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī と署名のあるものと無署名の明らかに別人の手になると思われるものがあり、私は今の所三人以上の書き込みと考えている。'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī と署名がある部分を検討すると本稿で指摘するが ar-Rawḍ の著者であることが判明する。この書き込み部分の記述と ar-Rawḍ の文章を比較すると彼の歴史敘述の形成過程の一端が

(9) Karatay, F. E., Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Arapça Yazmalar Kataloğu, vol. 3, İstanbul, 1966, p. 391.

(10) この2種類の校訂本の作成に用いられた諸寫本は以下の通りである。

Inbā' (H) は、ハイデラバードの al-Maktabat as-Sa'idiya 所蔵寫本を基礎として、エジプト國立圖書館所蔵寫本、2種のバリ國立圖書館所蔵寫本を利用したと述べているが、全て寫本番號は挙げていない。

Inbā' (C) はダマスカスの al-Maktabat az-Zāhiriya 231 tāriḥ を基礎として、その他7つの寫本を校訂作業に用いたと述べている。それは ① Maktabat al-Azhar, 710 tāriḥ, ② III Ahmet 2942/1, ③ B. N. 1601, ④ al-Maktabat as-Sa'idiya, 94 tāriḥ, ⑤ メディナ寫本, 523 madīna, ⑥ イエーメンのサヌア寫本でエジプト國立圖書館にマイクロフィルムとして所蔵されている寫本, ⑦ B. M. 1601 である。

2種類の校訂本で共通なものは、③と④それに確定はできないが⑥と思われる。

②について、この寫本の第二巻目にあたる III Ahmet 2942/2 は校訂に利用していない。④にはカイロ版校訂者 Ḥasan Ḥabashi 博士によると al-Biqā'i の書き込みがあるとするが、ハイデラバード版の校訂者は人物を特定してはいないが脚注部分にその寫本の異同を示している。

うかがわれる。

三 ar-Rawḍ の著作の目的と敘述方法

アブドル＝パースィトは ar-Rawḍ の始めに以下のように述べる。

「私は、私が生まれた844年からこの歴史書を始めたが、それは年代記部分 (al-ḥawādith al-mutajaddidāt) と当該年に没した人物の傳記部分 (al-wafayāt) を的確に伝えるためである。私は、この書において日々の出来事の輝きや當時の事件の有名な事柄とこの時代の人々のうちの名士の傳記 (tarājim) や點鬼簿 (wafayāt) の部分を明確に詳しく述べることにする。しばしば私は、現存する名士について、傳記部分あるいは当該人物が就任した職務を述べる部分においてあるいはそれ以外の場所でも、適切にあるいは主題から逸れることがあっても、何事も輕視することなく注意深く傳記情報を記述した。私は、この敘述 (ta'liq) の餘白部分 (hāmish) に赤字で幾つかの傳記部分や點鬼簿部分の内容を示す表題を記入したが、それはそれらの状況を知ろうと求める者に、求める部分を容易に見つけることが出来るためにである。私はこの書物を書寫する寫字生に、検索を容易にするためのこの部分を餘白部分に書き落とすことがないようにと指示した。

我々は、この歴史書が、大カーディー Badr ad-Dīn al-'Aynī の二つの歴史書やシャイフル＝イスラームでハーフィズル＝アスルである Ibn Ḥajar al-'Asqalānī の歴史書や at-Taḥī al-Maqrīzī の歴史書それにその他歴史書の名に恥じない熟達した諸賢が執筆した有益で著名な數多くの史書の續編 (dhayl) となることを望む。過ぎ去った何年かの部分を、これらの歴史書に重複して記述することは、前述の諸史書の扱っている年度に續く年度を扱う續編に相應しいと考えた。相互に重なった部分の年度については、續編として有益となる附加部分をつけ加えた。

この方法が全うされて完了して香り高く、實を結んだとき、私はそれを「生涯の出来事と諸々の傳記における微笑む庭園 (ar-Rawḍ al-Bāsim fī Ḥawādith al-'Umr wat-Tarājim)」と名附けた。

私はこの書物に、素晴らしく信頼の置ける諸先達が傳えた情報のなかで私が

確信したもの、あるいは私自身が目撃したこと、あるいは伝えられたもののなかで詳しく信用に値するものを盛り込もうとした。神一頌えあれ—が私にご援助下さり、目的を全うさせ賜わんことを。至高至大なる神よ、私を適切な言葉遣いをするように導いて下さり、人を誹謗中傷することを避け、偏った見方に陥ることなく又思い違いをしないようにお助け下さい。また私が（この書物を著すことで）、相應しい全ての者にしかるべき権利を與え、譽められ名聲を高める行いを求める人に導きを與え、また恥ずべき生涯を送った者どもの惡徳から遠く離れることの一助となることが出来ますようにご援助下さい。これこそが私が意圖するものです。」(Vatican Arabo, 728, fols. 1b-2a)

著者はここで彼が模範とする歴史家をあげている。とりわけ歴史書を自分の生年から始めていることや、續編 (Dhayl) として歴史を書き繼ぐと述べている部分は、彼の師の一人であるイブン・ハジャルが生年の773年から敘述を始めていることを強く意識していると考えられる⁽¹¹⁾。

寫本を検討するとこの序文に明確に述べられている方針に従って敘述されていることが確認出来る。すなわち先行する歴史家の敘述を名前を挙げて、あるいはある者がと名前を挙げずにしかし概ね引用箇所を明記して日々の出來事を敘述している。彼が述べているように、年代記部分に彼が實際に目撃したことや知人からの傳聞情報が盛り込まれているとともに、出來事の當該人物についての傳記情報が書かれている部分もある。他の同時代史料に比べても月、日、曜日という枠組みをできるだけ貫徹して敘述しようとしていることも指摘できる。

年代記部分に續いて、その年に没した人物についての傳記がイスムのアルファベット順に、イスムを赤字で表示して、書かれている。また當該人物の息子や孫など執筆時に現存する人物について職名をはじめ様々な情報が敘述されている場合もある。彼が生年から敘述を始めているので當該人物のことを良く知

(11) Inbā' (C), vol. 1, pp. 3-5. Dhayl について Farah, Caesar E., *The Dhayl in Medieval Arabic Historiography*, New Haven, 1967 が、また傳記集研究からみた傳記情報の時代的な變化については、al-Qadi, W., "Biographical Dictionaries: Inner Structure and Cultural Significance" *The Book in the Islamic World*, (ed. by Atiyeh, G. N.), Albany, 1995, pp. 93-122 が概括している。

っていた人に直接接触できたためである。様式的な特徴として序文で彼が指示したと述べているように年代記部分と傳記部分の兩者の餘白部分に適宜赤字で表題や人名が記されている。

別稿で検討したように著書の個人史的信息も挿入されていることはこの書物のもう一つの特徴である¹²。著者自身のマグレブとアンダルスへの旅の様子もそれが行われた年代記部分に日附順に他の情報と並んで敘述されている。

四の一 年代記情報

次に具体的に彼が史實をどのようにして確定して、敘述したのかを年代記部分と傳記情報の二つに分けて検討する。

ar-Rawḍ の記述の成立過程を跡づけるためには、850年迄についてはイブン・ハジャルの史書の記述との比較であり、それ以降はアッサハーウィーをはじめとした同時代史料との照合が考えられる。本稿で848年を取り上げたのは二つの理由のためである。一つは、850年以前の彼の敘述方法の一つのモデルを作ること、二つめは寫本の殘存状況のためである。すなわち寫本の第一巻で年代記部分と傳記部分が缺けることなく、形式的に整って一年分を傳えているのはこの848年のみであるためである。また848年は歴史の流れの面からも、あるいはイブン・ハジャルやアッサハーウィーそれに著者自身の個人史的な面からも重要な事件が續發した年でもあった。

848年の記述は寫本 ar-Rawḍ (Vatican Arabo, 728) で20aから31aまでである¹³。

(12) Weintritt, O., "Concepts of history as reflected in Arabic historiographical writing in Ottoman Syria and Egypt (1517-1700)", *The Mamluks in Egyptian politics and society*, (ed. by Philipp, Th. and Haarmann, U.), Cambridge, 1998, pp.188-204 が指摘する個人的な傾向は既にそれ以前の時代に迎えることができる。

(13) 20a の本文の始まる上の餘白に本文とは別人の筆跡で「そしてスィラージュ・ブヌル＝ムラッカン」と人名が書かれている。これは形式的に 19b に續くことを示しているが、内容を検討すると 19b は844年の傳記部分であり、ここに續くものではない。エジプト國立圖書館 2403 tārikh Taymūr は、前記注(3)と注(5)に述べたようにこのような部分を並べ直したものである。

表1は ar-Rawḍ の年代記部分の記事を他の史料と対照した表で主要な出来事を取りあげたものである。右端から順に(1)イブン・ハジャルの Inbā' の2種の校訂本の記事、(2) Inbā' (T) の餘白部分の書き込み部分(年代記部分はアブドル＝バースィトの署名があるものが大多数である)、次にアブドル＝バースィトが ar-Rawḍ を執筆する際に参照した(3)イブン・タグリービルディーの an-Nujūm と Ḥawādith の記事と(4)アル＝アイーの 'Iqd の記事、(5)は、著者の同時代のイブン・ダーウード・アッサイラフイーの Nuzhat にみられる記事、(6)に著者の ar-Rawḍ の記事、(7)著者の師の一人アッサハーウィーの at-Tibr の記事、(8)著者の學生の一人イブン・イヤースの Badā'i' の記事であり、それぞれの史料の引用箇所も表に挙げた。尙、'Iqd をはじめいくつかの史書は ar-Rawḍ とは違って、厳密に月日順に敘述されていないが、それを月日順に並べて表示した¹⁴⁾。

この表1について、大まかな情報の流れを考えると、アブドル＝バースィトは、(1)の記事に(3)と(4)の伝える重要と思われる部分を(2)という(1)の一つの寫本の餘白部分に書き込み、また独自の情報をつけ加えている。さらにまとめて(6) ar-Rawḍ を執筆した。(5)と(7)については殆ど同時期に作業が進んでいたと思われる。(8)についてはアブドル＝バースィトからの情報がどのように伝わっているのかに注目したい。

以下この年の事件の幾つかを取り上げ、どのように ar-Rawḍ の敘述が形成されたかを検討してその特徴を指摘する。

表1に示したようにこの年は前年から續く疫病で年が明けた。ar-Rawḍ には「カイロでは死者はディーワーン (diwān al-mawārith al-ḥashriya) によると

(14) この表の配列について附記すると、(5)は同時期に著作されていたようで(3)や(4)をもとに著者自身の情報源からの情報をつけ加えて ar-Rawḍ とは直接には関連なく著作されたと考えられる。(3)や(4)の情報が、(2)と(5)にそれぞれ取捨選擇されていることも比較していただきたい。(7)については、著者はときに「アッサハーウィーの歴史 (Tārīkh al-Khāfiḥ as-Sakhāwī)」として言及しているが、現在刊行されている校訂本 at-Tibr よりはるかに情報量が少ないものであったと考えられる。この書物は現在再校訂の作業が進行中であり、それによると著作の初期の段階では、情報量が少ないものであったことが指摘されている。したがってアブドル＝バースィトが利用できたのは(7)自體ではないので(6)の後に配列することにした。

毎日120名とのことだが、ディーワーンが把握していない者が200名以上であるといわれている。私はこれ以上の死者であったと思う。というのは死者の多くは子供や奴隷が多く、大部分の子供はディーワーンが把握していないし奴隷も同様であるからである。従って300名か400名以上の者が亡くなったと言える。この状況は悪化して、特にこの月の下旬（メッカから）巡禮團が戻ってきた後、巡禮に参加していた子供や奴隷が多数病に倒れ一日に1000名に上る死者が出た。」と敘述する¹⁶。それは Inbā' の簡単な数字に比べると an-Nujūm 等を参照して判断したことがうかがわれる。

この時 Inbā' の著者イブン・ハジャルは何度目かのシャーフィイー派大カーディーであったが¹⁶、体調を壊したことは自著に記述されており、ar-Rawḍ と at-Tibr にも記されている。また疫病について彼が著した書物はこの年に完成したといわれる¹⁷。しかし快復後、彼は、ar-Rabi' II 月の Muḥibb ad-Dīn をめぐる事件の当事者の一人として一時免職されたこともあり、またスルターン Jaqmaq のメッカ政策に積極的に関与して弟子の Burhān ad-Dīn をメッカのシャーフィイー派カーディーに推挙したり、彼自身がアムル・モスクの監督官に任命されたりと積極的に活動している。また、ar-Rawḍ には著者の父 Khalil が牢に繋がれたときにその解放運動にイブン・ハジャルが乗り出したと傳えているが Inbā' にも at-Tibr にも觸れられておらず、その眞偽は不明である。アッサハーウィーは、Rabi' II 月 8 日にある商人の娘と師イブン・ハジャルのもとで結婚契約を結んだことを at-Tibr に記す程であったが Khalil の件については Rabi' II 月 4 日に追放されたとのみ傳えているだけで、解放運動については述べていない。

この年の国際関係を反映している記述は、〈A〉¹⁸ロードス島遠征軍の派遣と

¹⁶ 年度が違うが、このディーワーンの数字を引用している敘述は、Dols, Michael W., *The Black Death in the Middle East*, Princeton, 1977, pp.169-85 に整理されており、また附録部分にはこの年を含む750年から922年（西暦1349—1517年）までの疫病流行の一覧表がある。

¹⁷ E. I., vol. III, pp.776-8, art., "Ibn Ḥadjar al-'Asqalānī" by F. Rosenthal.

¹⁸ Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Badhl al-Mā'ūn fī Faḍl al-Ṭā'ūn*, ed. by Ibrāhīm Kilānī Muḥammad Khalifa, San'a'-Bayrūt, 1413/1993, p.231. また at-Tibr, p.87 参照。

¹⁹ 〈A〉以下〈K〉までの印は、表1の各史料における出来事取り扱い方を比較する

戦鬪そして敗北と歸還, <K>オスマン・トルコのムラト2世によるヴァルナの戦いでの勝利と戦果を誇示するために, 獲得した捕虜をマムルーク朝, アク・コユンル, ティムール朝に送っていること, また<J>スルターン Jaqmaq がシャー・ルフにメッカのカアバに(マムルーク朝が送るキスワの下に)用意したキスワを懸けることを前年に許可したことを受けて, キスワがカイロに運び込まれ混乱を巻き起こしたが, 最終的にメッカに懸けられたことなどである。

<A>については, ar-Rawḍ は他の史料に比べて月日順に詳しく記述している。彼は Inbā' が Muḥarram 月22日を遠征軍の出発日としていることを述べ, それは師の思い違い(wahm)であり, 正しくは後に述べるように Rabi' I 月のことであると記す。at-Tibr は Inbā' の日附を踏襲して遠征を記述している。この遠征については, ar-Rawḍ は, 基本的にはイブン・タグリービルディーの an-Nujūm あるいは Ḥawāḍith の日附に従って敘述している。遠征の情報については Inbā' にも觸れられているように, 遠征軍に参加していた歴史家 Burhān ad-Dīn al-Biqā'i の書簡などから集めたと思われるが¹⁹, これまで刊行されている歴史書には見られない戦いの詳細で生き生きとした記述がある。

この遠征は前年に行われたロードス島の東にある小島 Qashtil (Castellorizzo) 遠征の成功に續いて計畫されたもので, 西暦1444年8月にロードス島に到着して後40日間要塞を包圍したが失敗に終わったもので, 翌年1445年に講和の協定を結ぶ動きが始まるきっかけとなり, これ以降はマムルーク朝はロードス島に軍事的に勢力を伸ばすことはなかった²⁰。

ために, 妥當と思われる生起した順に表の記事の最後にアルファベットを附けたものである。したがって ar-Rawḍ が觸れていない事件についても情報の流れを示すために附した。

(19) Inbā' (H), vol. 9, pp. 223-4, Inbā' (C), vol. 4, pp. 226-7. Inbā' (C) は, 注で al-Biqā'i の書き込みのある Inbā' 寫本を明記して, Jumādā I 月7日附のこの知らせの Inbā' 本文に「後で詳しく述べる」とあるが後の部分に述べていないことについて, 餘白部分に al-Biqā'i は, 「私はこれを見つげなかった」と不平をもらしていることを指摘している。Inbā' (H) は, この書き込みが al-Biqā'i のものとは認識していないので, この書き込み部分を別の箇所の附加部分としたために文意が不明瞭となっている。

また al-Biqā'i, Iẓhār al-'Asr li-Asrār Ahl al-'Asr, (ed. by Muḥammad Sālim b. Shadid al-'Awfi) vol. 1-3, ar-Riyāḍ, 1312/1992 には, この848年の部分は未だ刊行されていない。

(20) Rossi, E., "The Hospitallers at Rhodes, 1421-1523" (in *A History of the*

〈J〉ティムール朝のカーン・シャー・ルフの使節の事件とは、100名以上の随行員と共にカイロに到着して、城塞でスルターンに謁見して、キスワを手渡した出来事である。すぐにこの経緯が発覚して、マムルークを始め住民の怒りを招き、使節團は襲われ宿舎も略奪された。この使節に同行して著名なカーディーも来ており、アッサハーウィーは at-Tibr でイブン・ハジャルが彼にイジャーザを與えたときに同席していたと傳えているが、Inbā' にはこの會見については記事がない。アブドル＝バースィトは Inbā'(T) の書き込み部分で前年にスルターンが返答として述べた承諾の言葉を引用しているが、これは an-Nujūm の記事の引用である。ar-Rawḍ ではさらに、使節が襲撃されたことを聞いてスルターンが激怒して警察長官 (walī saḥāna) を叱責する様子を丁度その場に立ち會った人物からの情報としてつけ加えている。

〈K〉ムラト2世がハンガリーとスラブの軍を破ったヴァルナの戦い(西暦1444年11月10日)についても、Inbā' には記述がない。Inbā'(T) には an-Nujūm と同じ文章が書き込まれている。ar-Rawḍ には、「カイロにアドリアノープル(エディルネ Adrnā)とブルサ(Burṣā)それにその両者の背後のルームの地の支配者(mutamallik)である al-Malik Murād b 'Uthmān の使節」が到着して「ハンガリー人(al-Anukrus)と呼ばれる Banū al-Aṣfar」を破ったことを傳えたと記している。ar-Rawḍ には捕虜の送致については後述するとあるが、その部分は我々の ar-Rawḍ にはない⁽²¹⁾。しかし an-Nujūm を含め他の史料には2ヵ月後に捕虜が到着したときの雰囲気を傳えている。この戦いはオスマン・トルコによるコンスタンチノープル陥落に至る動きの始まりと評價され⁽²²⁾、ロードス島遠征の失敗と並び以降のマムルーク朝の對外政策に大きな影響を持つものであった。

以上對外關係の3つの事件を概観して、ロードス島遠征を除いて、Inbā' に

Crusades, vol. III, ed. by Hazard, H. W., Madison, 1975) pp. 319-20.

(21) 戦いの経過については翌年849年 al-Muharram 月始めに行われたカイロに送致された捕虜のイスラーム教への改宗を述べた部分で詳述している。(Vatican Arabo, 728, fols. 31a-32b).

(22) Geanakoplos, D. "Byzantium and the Crusades, 1354-1453" (in *A History of the Crusades*, vol. III, ed. by Hazard, H. W., Madison, 1975), pp. 96-7, また Imber, Colin., *The Ottoman Empire 1300-1481*, Istanbul, 1990, pp. 129-136.

は述べられていないがアブドル＝バースィトは Inbā' (T) の書き込み部分、ar-Rawḍ と執筆を進めていくなかで新たな情報を収集・整理した経緯がうかがわれる。

次にエジプトを中心とした若干の記述を分析する。先ず氣がつくのは、對外關係の部分でも指摘したが、Inbā' の情報量の少なさである。この歴史書は敘述の終わりに近い年代は簡単な記述が続く。Inbā' (T) の餘白部分を検討すると、アブドル＝バースィトが an-Nujūm また Ḥawādith あるいは 'Iqd からの情報を書き込んでいることが明らかとなる。官職の任免情報については、an-Nujūm から引用したとは明記せずに一字一句同じ文章が同じ順序で記入されている一方 'Iqd からの情報は「アル＝アイニーは次のように述べている」と明記している²³。引用はイスラム暦第二月の Šafar 月から年末に至るまで同様であるが特に Ramaḍān 月から以降の部分に多くみられる²⁴。Inbā' (T) の fol. 193b の本文が第一二月の Dhu'l-Ḥijja 月の出来事の敘述であるから、fol. 193a には Dhu'l-Ḥijja 月までの情報が、まさに餘白を残すことなく書き込まれている。そのためであろうか、表 1 に示したように特に Ramaḍān 月以降をみると、同月また同日あるいは同年と始まる記事が多い。これはそれを引用する際に間違いを引き起こす一因であったように思える²⁵。

アブドル＝バースィトは Inbā' (T) の餘白部分に書き込み、そして再び an-Nujūm と Ḥawādith また 'Iqd を参照して整理して ar-Rawḍ を執筆したと思われる。それは Inbā' (T) の書き込み部分に比べると ar-Rawḍ では月日をはっきりと特定していることから明らかである。また Inbā' (T) の書き込み部分にある記事で ar-Rawḍ にない記事もあることから、幾つかの情報は

²³ この引用の形式は ar-Rawḍ においても概ね同様である。異議を唱えるときにはイブン・タグリービルディーの名前を明記するときと、「ある者は次のように述べる」と明記しないときがある。

²⁴ Inbā' (T), fol. 193a の書き込み部分は an-Nujūm, vol. 15, pp. 363-367 の該当部分の引用である。

²⁵ fihi と fiḥa, この二つの句を取り違えていることも多い。一方 ar-Rawḍ では、同月すなわち某月または同日すなわち某日、同年の某月と特定して、間違いを防ごうとしている。しかし全體にわたり同じ方式で敘述されているわけでない。寫字生が月や日を間違えるとそれが長く行文の混亂をもたらすことになる。

ar-Rawḍ の別の箇所に移動したかあるいは除外したと思われる。特に傳記情報を書き込んでいる部分は当該人物の没年に移したとも考えられる。

表1に示したように ar-Rawḍ と他の史料を比べると、Rajab 月以降の記述は一つを除いて出来事の記述は、それぞれの著者に取り上げ方や敘述の相違はあるが、日にちが殆ど一致していることである。唯一の例外であるブハイラの遊牧民討伐の事件についてアブドル＝バースィトは Inbā' (T) には Dhu'l-Hijja 月16日と書き込んでいるにもかかわらず、26日となっているのは單に10と20というアラビア語で間違えやすい語尾を寫し間違ったと考えられる。

しかし ar-Rawḍ の Rabi' II 月と Jumādā I 月と Jumādā II 月の記述と他の史料に見られるこの三カ月の記述との間には大きな相違がある。イブン・タグリービルディーは Jumādā I 月と Jumādā II 月には取り立てて事件はなかったと書き、何も記述していない。しかし ar-Rawḍ には、著者が最も書きたかった事件の一つであったと考えられる父 Khalīl の事件が詳細に記述されている。

結論から先に述べると Rabi' II 月の記事の多くが Jumādā I 月の項目以降に記されてしまったと考えている。その判断の根拠は表1の〈I〉ナイル川の満水の記述と〈H〉ダマスカスの城塞のナーイブ職の人事の記述と〈G〉Khalīl の事件の記述の日附である。

先ず〈I〉ナイル川の満水の日附は、Inbā'(H) では Rabi' II 月9日(火)、Inbā'(C) では19日(火)としている。Inbā'(T) の寫本の本文には19日(火)⁽²⁾とある。アブドル＝バースィトは Inbā'(T) の寫本の本文に附加することがあれば餘白に書き込んでいるが、この部分にはないことから、これは ar-Rawḍ では同様に Rabi' II 月19日(火)の部分にあるべきで、al-Jumādā II 月19日としているのは彼が寫字生の間違いのために起きたと考えられる。また後に著作された Badā'i' が al-Jumādā II 月としているのはこの ar-Rawḍ を引用していることが明らかとなる。また Inbā'(H) の日附については、脚注部分に注記がないので何らかのミスと考えている。

(2) Inbā' (T). fol.192b, 書き落としたようで 'ashara (10) は9の上、前行との行間
に書いている。

〈H〉ダマスカスの城塞のナーイブ職の人事の記述と〈G〉Khalil の事件の記述は、兩者とも Inbā'(T) には Rabi' II 月 3 日と彼自身が書き込んでいる。〈C〉の Rabi' I 月 17 日のロードス島遠征軍出航の記述に見られるように Inbā'(T) に彼自身が書き込んだ情報を ar-Rawḍ にまとめる段階で変更があれば原則的にそれを明記している。例えばこの部分では彼は「17日(土)に、イブン・タグリービルディーは16日と述べているが」とその記述をはじめている。その彼の記述の様式的な方法を考慮して〈H〉の部分を検討すると、彼は「Jumādā I 月 2 日(月)に、3日と述べている者は誤っている」と記している。このある者とはイブン・タグリービルディーと考えられ彼の伝える3日を變更していると考えられる。問題は Jumādā I 月の部分である。一方著者の別の著書 Nayl は、原則として日にちと曜日は記述せず各月ごとに出来事をまとめていて、しばしば月についても不明確な敘述があるが、この〈H〉にあたる記事ははっきりと Rabi' II 月の部分にある。従ってこの部分は Rabi' II 月 3 日を 2 日に變えていると考えられる。〈G〉Khalil の事件の記述も同様に考えられる。少なくとも事件の發端は Rabi' II 月であったと考える。この事件についても Badā'i' は Jumādā II 月に述べていることから、ar-Rawḍ に據っていることが判明する。また同じ月に起きた〈H〉と〈G〉を ar-Rawḍ で Jumādā I 月と Jumādā II 月に分けている理由は私には今の所不明である。

以上検討したように ar-Rawḍ の Jumādā I 月と Jumādā II 月の記述は、ロードス島遠征軍の記述部分を除いて全て Rabi' II 月の間違いでありそれは今の所、寫し間違いと考えざるを得ない。また Badā'i' が ar-Rawḍ の記述を繼承していることも明らかとなった。

次にその他の記事を表 1 に示した史料相互の關係と ar-Rawḍ の敘述内容の特徴を若干考えてみたい。

〈B〉はハーンカー・アッシャイフーニーヤのハナフィー派のスーフィー Ibn al-ʿAṭṭār al-Ḥanafī が同じハーンカーの ash-Shams al-Kātib のスルターンへの讒言によって失脚させられたが、最終的にはやはり同じハーンカーの al-Kamāl b. al-Hamām が彼を擁護してスルターンに書簡を送り、追放を思い

とどませた事件である。この事件について ar-Rawḍ には「アッサハーウィーが傳えているのみである」と記している。イブン・タグリービルディーの記事を検討すると an-Nujūm にはその記述はなく Ḥawādith で記しているのみである。その他の記述の比較から私は ar-Rawḍ が利用したイブン・タグリービルディーの記述は少なくともこの年度の記述においては an-Nujūm のみであったと言えるのではないかと考えている。Badā'i' が Rabī' II 月の項目にこの事件を記しているのは〈D〉の扱いと同様に Rabī' I 月を Rabī' II 月と間違ったのか校訂本のミスと考えられる。

〈C〉の記述は an-Nujūm から Inbā'(T) そして ar-Rawḍ という情報の流れが典型的に見られるものである。Inbā' (T) の書き込み部分にある遠征参加者とされる人物がこの遠征に参加したかどうかという疑問は ar-Rawḍ に繰り返されている。この記事の後半部 Sūdūn as-Sūdānī について、'Iqd や at-Tibr や Nuzhat が翌月の部分に述べているのはそれぞれの史料系統を示しているとも考えられ、あるいはこの人物が最終的にアレppoに追放されたのが翌月になったとも解釋できる。

〈E〉は、イブン・ハジャルが一時カーディー職を免職になった事件である。シャーフイー派の裁判官代理のカーディー Muḥibb ad-Dīn Abū al-Barakāt が、ある件に認証を与えたが、スルターンはその裁定に疑わしい点があるとみなし、カーディーと裁定に係わった證人たちを呼び出した。召喚された證人たちは驚き、各人がそれぞれ違ったことを申し立てたので、スルターンはカーディーを刑に處して入牢を申し渡した。イブン・ハジャルはこの人物が彼の代理であるために、責任者として、實質的には免職である蟄居を命じられたのである。最終的にはイブン・ハジャルが申し開きの機会を与えられ、スルターンは以降裁判官代理(ナーイブ)の数は10人を越えてはならないと釘を刺して彼を復職させ、ついで彼の推輓でこのカーディーの復職も認めて幕を閉じた。Inbā'(H) (C) は、著者イブン・ハジャル自身が係わったこの事件について、経緯とカーディーに科せられた罰などについては詳しくは述べていな

㊦ これは表1の〈F〉アズハル・モスクのナーズィル職の記事もその一例と考えられる。

い。一方アブドル＝バースィトは Inbā'(T) の書き込み部分で、アル＝アイニーの名を明記して 'Iqd から文章を引用して、スルターンが激怒してこのカーディーに科した罰、すなわちターバンをとって城門まで歩かせたり、重罪人の牢に入牢を命じたことを述べた後、スルターンに近い知人からの情報としてこのときの激怒の様子を伝えている。そして著者(アル＝アイニー)の敘述がその様子をよく伝えていると感想を記している。すなわち餘白部分に關連記事を書き込み、次いでその關連記事に自身の感想を記入しているのである。事件の目撃者から経緯を聞いて確認している彼の執筆態度を良く示すものであろう。しかし ar-Rawḍ には目撃者の證言記事と自身の感想の部分は書かれていない。

また興味深いのはスルターンの命令の伝え方と納め方である。蟄居の命令はスルターンに近侍するマムルーク(khāṣṣakiya as-Sulṭān)で祕書(ad-dawādāriya aṣ-ṣighār)の一人が伝えたが、續いてスルターンに近侍しており相伴役(jalis)の Shams ad-Dīn al-Kātib ar-Rūmī が來訪して免職を後悔しているスルターンの眞意を伝えて翌日の朝早く伺候するようにとの命令を伝えている^㉔。この人物については Inbā'(T) の書き込みによると、即位する以前からスルターン aḡ-Zāhir Ṭaṭar に仕えた人物で、スルターン Jaqmaq の時代にも影響力を持っており、知識はないが交渉事に長けていたとある。そして父 Khalil が彼と親交があったと記して、ユーモラスな彼の様子が好意的に活寫されている。

この事件については大カーディーのイブン・ハジャルを巻き込んだので、本稿で検討している全ての史書に記述があるが、その裁定の内容に踏み込んで敘述しているのは Nuzhat のみである。彼によると、事の起こりは、ある裕福な人物が相續人たちに多額の遺産を残して死に、その遺産の件は子供たちが幼いためにシャーフィイー派カーディーに任されたことにあった。そのカーディーは没した人物の妻たちの一人に寡婦産權を認めたところ後見人の一人がそれを不服としてスルターンに訴えたためにこの事件が起きたと記している。それに續けて彼はこのカーディーは毎日600ディルハムの収入があるのにカーディー職を辞さないと不思議なことでであると揶揄する。Nuzhat という史料の獨自

㉔ Nuzhat, pp. 300-1 のみその経緯が異なっている。すなわち事件がおこりイブン・ハジャルが、自ら辭任しそれを聞いてスルターンがアッルーミーを派遣したと傳えている。

性の一端を示す敘述と言えよう。

〈L〉は自稱マフディー al-Farrayānī についての記述である。この年の末スルターンは、この人物の噂を聞き、エルサレムのナーイブに書状を送り彼をカイロに連行するように命じた。彼は Jibāl Nābul's (Jabal Ḥumayda) の遊牧民の間で慕われた人物でマフディーとして運動を展開したといわれた。彼はナーイブのもとに出頭したがその後は活動をやめたので、カイロに連行されることなくこの事件は終息した。この人物については、Inbā' (H) (C) と at-Tibr が彼の Jibāl Nābul's に向かうまでのカイロなどでの活動を中心として記述して、この活動停止までを述べているのに比べると、Inbā' (T) の書き込み部分はそのまま ar-Rawḍ に記されているが、それは表だった活動をやめた彼の後日談である。それによると彼は以降ダマスカスとタラーブルスとの間を移動して、タラーブルスでは彼を厚遇したその軍務官 (nāẓir jaysh) の Sharaf ad-Dīn Mūsā b. Yūsuf⁶⁹ の館に留まるのが常であり彼の多数の書物は彼の館に保管されていたと述べている。また彼はラタキヤで862年に死んだとも傳えている。このように詳しい情報に接近できた理由は、父 Khalil が当時20人長の待遇で家族とともにタラーブルスに居住していたからであり、著者自身も18歳になっており、この人物の噂は記憶に鮮明に残っていたと思われる。そして ar-Rawḍ には、この人物はマグリブで嘗て運動を展開したマフディーの 'Ubayd Allāh や Muḥammad b. Tūmāt の事跡についてもよく知っていたとつけ加えている。

〈G〉は著者の父 Khalil をめぐる事件でありその概要については前掲の拙稿に述べたが、アレppoのナーイブ Qānbāy al-Ḥamzāwī が Khalil を中傷してスルターンに申し立てたために、Khalil がアレppoのアターバク職を解かれて城塞の獄につながれた事件である。Inbā' (T) の書き込み部分には「何の罪もないのに父は獄につながれた」とのみ記入されているが、ar-Rawḍ には詳

⁶⁹ アッサハーウィーは aḍ-Ḍaw', vol. 10, p. 192 でこの人物の傳記を記しているが、彼の家柄はもともとシャウバクのキリスト教徒であることや、彼がタラーブルスの軍務官の職にあったことを記しているが好意的な記述ではない。またこの人物との関係については述べていない。一方アブドル＝パーシトは862年の彼の死去に觸れた部分で好意的に扱っており、タラーブルスの有力者であったことを記している。(Nayl, (Hunt. 610), fols. 121a-b).

しく経緯を述べている。それによると Qānbāy が不正を行い、一方 Khalil が公正さとシャリーアを尊重して、彼に不当に扱われた者のために辯護したために、両者はかねてから敵対関係にあったと説明して、Qānbāy は策略をめぐらしスルターンが入牢を命令するように教唆したと記す。興味深いことは彼が斷罪された理由として、アターバクとしてアレppoに就任したときの行進（マウキブ）の際の行爲があげられている事である。彼はアレppoの郊外でマウキブの用意を整え、彼の旗が廣げられ、小太鼓や大太鼓が叩かれ、笛が吹かれ、にぎにぎしく町を行進してアレppoのスルターンの城塞の門前を通り過ぎようとした際に、何かが門に投げられた。彼はこれはスルターン權力を言祝ぐ（nāmūs as-Salṭana）慣例であると主張したが、その説明は受け入れられずに彼を追求する口實とされた。故實に明るい Zubda の著者 Khalil らしい主張であったが受け入れられなかった。後彼は釋放されると、エルサレムを經由してハリール（ヘブロン）に戻り、著者と家族を残してメッカ巡禮に旅立った。

ar-Rawḍ の個人史的記述として、著者は父 Khalil がこの無實の罪で入牢した償いとして、スルターンからイクターとして交通の要衝カークーンの町と國庫から Baṭṭat bi-Murabba'a 村を rizk として與えられたことを述べ、後に必要なことがあってそこを賣却したが、収益は年に800ディーナールぐらいあったが1000ディーナールという安價で賣却したと記している。また著者は當時4歳であって、Inbā' (T) の餘白には、この年マラティーヤで胸に刺し傷を負ったと書き込んでいるが、餘りにも個人的な事と考えたのか ar-Rawḍ には記していない。

四の二 傳記情報

表2はこの年に没した人物の傳記情報を傳えている史料と人名を一覧にしたものである。左端の人名欄は、検討した史料のなかで最も多くの人名を擧げているアッサハーウィーの at-Tibr の傳記部分にある人物36名（欄4）とその他の4名を加えた40名で、通し番號を附した。左から次の11の欄に史料を並べた。すなわち、欄1はイブン・ハジャルの Inbā' の傳記部分でハイデラバード版（Inbā' (H)）とカイロ版（Inbā' (C)）にある人物、欄2は著者アブドル＝バ

ースィトの ar-Rawḍ の傳記部分にみられる人物（この欄の番號は ar-Rawḍ の傳記部分にある人物19名をアルファベット順に番號を附けたもので表3の右端の欄に附した番號と同じである）、欄3は同著者の Nayl にみられる人物と Majma' にその傳記が残っている人物、欄5はアッサハーウィーの傳記集 aḍ-Ḍaw' に傳記が掲載されている人物、欄6は同じくアッサハーウィーが ad-Dhahabī の Duwal al-Islām の續編として書いた al-Wajīz と adh-Dhayl⁽⁹⁾にみられる人物、欄7はイブン・ダーウードの Nuzhat の傳記部分にある人物、欄8は後代に著述されたイブン・イマードの Shadharāt にみえる人物、欄9と欄10は著者が ar-Rawḍ を著作するために常に参照した書物で欄9はアル＝アイニーの 'Iqd にみえる人物、欄10はイブン・タグリービルディーの歴史書と傳記集にみられる人物、欄11は著者の學生イブン・イヤースの Badā'i' にみられる人物、以上である。史料の各欄に傳記情報が記載されている箇所を記入した。空欄はその人物の記述がないことを示している。

先ず人名欄に at-Tibr 記載の36名に附加した4名について説明すると、ar-Rawḍ をはじめ幾つかの書物には、ある人物がその年に没したと他の書物で伝えられていれば、先ずその人物名を擧げて、その後で彼は實際は違う年に没したと考えると敘述する。例えば、通し番號2の Abū Bakr は Inbā' のある寫本に記述があるので人名欄に加えた。同様に Inbā' あるいは ar-Rawḍ が同年に没したあるいは没したとする情報があると述べている人物を表に加えた（通し番號14, 15, 16）。すなわちこの表2は848年に没した、また没したと伝えられている全ての人名とそれに言及している史料の箇所を表している。検討する史料の範囲を広げればより多くの人名を採録できるだろうが ar-Rawḍ の傳記部分を比較するには今のところ充分と考えている。

次に表2から考えられることをまとめてみたい。

表2の欄3の著者の別の著作 Nayl には欄2の ar-Rawḍ の情報が一人を除いて傳達されている。その一人とは ar-Rawḍ の No. 18（通し番號39）Yūsuf b. Khalīl b. Shāhīn すなわち著者の異腹の一つ違いの五歳の兄、それに関連し

(9) この二つの書物は題名が違うが同じ内容の2種の校訂本である。ここではそれぞれの該當ページを記入した。

てその兄の母が父の解放奴隷であり執筆時には約70歳で著者と實母と同居して現存しているという記事である。

欄4と欄5と欄6はアッサハーウィーの著作であるが、欄4の at-Tibr と欄5の浩瀚な人名録 ad-Ḍaw' を比べると ad-Ḍaw' は at-Tibr にみえる人物の大多数の人物について収録しているが全てではないことが判明する。また欄6の al-Wajīz/adh-Dhayl は傳記情報については欄5から選んだことが判る。すなわち欄4に記述があつて、欄5に記述がなく欄6に記述がある人物はない。欄8の後代に著作された Shadharāt は、欄4と欄5と欄6の流れにある書物で欄6をさらに精選したことも指摘できる。また欄9、欄10に遡って検討していないことも指摘できるかもしれない。

欄7の Nuzhat は、三人の人物しか挙げていない。ar-Rawḍ の Nos. 3, 11 (通し番號11, 27) と ar-Rawḍ にない通し番號35の三人である。欄9と欄10を利用して、特に師であるアル=アイニー (欄9) に従つて敘述したのであろうが、通し番號35の人物についてはイブン・タグリービルディー (欄10) に従つたために ar-Rawḍ と異なつた記述となつたと指摘できる。この通し番號35の人物については、後に Inbā' の2つの刊本と Inbā' (T) の記述を検討するとき (表3) に述べたい。

欄11の Bada'i' にみられる傳記情報は全て ar-Rawḍ (欄2) から選んでいることも確認できよう。以上表2は、少なくとも Inbā' が扱っている時代の傳記情報の流れの一端を示すものであると考える。

次に Inbā' の2つの刊本 (すなわち Inbā' (H) と Inbā' (C)) と Inbā' (T) の本文部分と書き込み部分それに ar-Rawḍ を比べて、アブドル=バースィトがどのように敘述しているのかを、また Inbā' の2つの刊本の特徴と問題點についても考えてみたい。

表3は、この4つの資料を比較してどのように傳記情報が伝えられたかまた編集されたのかを示したものである。まず氣がつくことは Inbā' 自體の傳記情報の少なさである。Inbā' (H) は6名のみ、Inbā' (C) は10名であるが848年に没した者は9名で、さらに al-Biqā'i の書き込みのある寫本についての校訂者の注記を参考にすると、その寫本自體では4名のみであつたことが判る。

Inbā'(T)の本文部分には、すなわち表3のInbā'(T)の欄で本文と記しているものであるが、3名である。Inbā'(C)の校訂者は、校訂する際に検討した8つの寫本のうち1つにでも、名前が記載されていれば、それを採って校訂本のなかに含め、脚注で異同を注記している。その例はInbā'(C)の最初に挙げられているAbū Bakr Yūsuf(表2の通し番號2)である。他の史料では彼の没年は847年であり同じInbā'(C)でも847年の部分にその傳記がある。しかし彼の没年を848年としている寫本が存在するので校訂本本文にその寫本の文章を掲載して脚注で注記している。Inbā'(H)は847年の脚注部分でその異説を注記している。この方法は注記を詳しく書き説明すれば、Inbā'の様々な寫本間の関係を示すことができよう。ar-Rawḍを検討するとき繋がりを見せてこなかった情報について、最近刊行されたこの校訂本Inbā'(C)は有益な手がかりを與えてくれる。

さてInbā'(T)とar-Rawḍを比較してアブドル＝バースィトがどのようにして傳記情報を記述しているのかを検討したい。先ずar-Rawḍの傳記部分の最初に挙げられている1. Aḥmad b. Muḥammad(通し番號5)の記述は、Inbā'(T)こそ彼が実際に読んで利用したInbā'の寫本であることを如實に示している(圖1参照Inbā'(T), fol. 193b 本文下から2行目)。すなわちar-Rawḍに「Aḥmad b. Muḥammad b. Ibrāhīm, イブン・ハジャルは、うっかり Aḥmad b. Ismā'īl とされている(sahā)」とある。校訂本のInbā'(H)とInbā'(C)の両者になく、またそれぞれの注記部分を見てもこのように記してある寫本はない。しかしInbā'(T)の本文はまさにこの通りに書かれている。したがってこの寫本の餘白に'Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafīと署名している人物は我々の著者に他ならないことが明かである。この人物はマールク派カーディーでイブン・ハジャルの年長の弟子であり、アッサハーウィーのat-Tibr, aḍ-Ḍaw'にも詳しい傳記が記されている。ar-Rawḍはこの人物の知人からの情報としてアッサハーウィーが伝える彼の誕生年を訂正している。

この年のar-Rawḍの傳記情報は大きく三つのグループに分けることができる。一つは、アッサハーウィー(表2の欄4)から情報を得たと考えられる傳記である。時には前述の1. Aḥmad b. Muḥammad(表2の通し番號5)の場合

のようにはっきりと名を擧げている場合があるが、多くは名は擧げていないが、内容からまたそれ以外からはその情報を迎れないために彼からの情報と今のところは考えざるを得ないものである(表3の ar-Rawḍ の Nos. 1, 2, 4, 8, 10, 13, 14, 16, 17, 19)。

二つめは、アル＝アイニーの ‘Iqd (表2の欄9) やイブン・タグリービルディーの歴史書と傳記集(表2の欄10)を利用して、それに自身が収集した情報をつけ加えて記述した傳記である(表3の ar-Rawḍ の Nos. 3, 5, 6, (7), 9, 11, 12)。

三つめは、著者が獨自に選んだものである(表3の ar-Rawḍ の Nos. 15, 18)。

以下この三つに分て具体的に個々の傳記の敘述の成立と特徴を概括することにする。

一つめのグループは、先ずダマスカスの muqaddam alf の 2. Timrāz al-Mu‘ayyadī (通し番號7), ダマスカスの amīr ṭablkhāna の 4. Sunqur (通し番號13), エルサレムで没したシャイフの 8. ‘Abd Allah (通し番號19), メッカで没したシャイフ 10. ‘Abd al-Muḥsin (通し番號23), ハンバル派シャイフ 13. Muḥammad b. ‘Abd Allāh (通し番號31), シャーフィイー派シャイフ 19. Yūsuf b. Muḥammad (通し番號40) があげられる。共通している點は、その記述が Inbā’(T) にはなく、現在までのところアッサハーウィーの at-Tibr 等からの情報以外に迎えることが出来ないものである。

その他の以下に述べる三人の記述は Inbā’(T) の餘白部分の無署名の書き込み部分にみえる。この書き込みの書き手は不詳であるが、at-Tibr 等からの情報と同種で、時期的には少々前に遡る情報源であると考えている。シャーフィイー派シャイフの 14. Muḥammad b. ‘Abd ar-Raḥmān (通し番號32) については Inbā’(C) のみ採録している。シリアの大商人 16. Muḥammad b. ‘Alī b. Abī Bakr (通し番號34) も Inbā’(C) のみ採録している⁸¹⁾。この人物は著名であるが、傳記は at-Tibr からの情報あるいは同種のものからの情報によって

81) 兩者とも Inbā’(C) の注記によると、al-Biqā’i の書き込みのある寫本にはないとのことである。Inbā’(H) にはないのはこれと同一の寫本であるためと思われる。したがって Inbā’ の初期の寫本にはない記述でイブン・ハジャル本人か、あるいはより可能性は高いと考えるが、別人が後に附加した部分と考えられる。

書かれたと考えられる。ar-Rawḍ には、著者がマグリブの旅の途中867年にチュニスの大商人から聞いた彼に関する逸話が紹介されるとともに、著者が父とダマスカスに居住していたときに父と親交があったと記している。シャーフィイー派シャイフで多数の著作を著した 17. Muḥammad b. Yaḥyā, Ibn Zahra (通し番號37) の傳記記事は Inbā'(H) にも Inbā'(C) にもみられない。at-Tibr にはより詳しい師弟関係についての記述があり、アッサハーウィー自身タラブルスで息子 'Abd al-Wahhāb に會ったと記している。ar-Rawḍ には、著者自身が Muḥammad の自筆の著作を見たことや、著者一家が862年から865年か少し前までタラブルスに居住していたので、著者は 'Abd al-Wahhāb のタラブルス・モスクでの講義に出席していたと記している。また彼は、この息子の短い傳記情報をつけ加え、彼の詩の一節を引用しているがこれは at-Tibr にある息子の傳記にも見られないものである。

二つめのグループには以下の傳記情報が含まれる。3. Ḥamza b. 'Uthmān (通し番號11) はアク・コユンルの支配者でこの人物については Inbā'(T) 本文になく無署名の書き込みにあるもので、その文章は an-Nujūm (表2の欄10) からの引用である。ar-Rawḍ には、より詳しい記事があり、その内容は彼の父 'Uthmān すなわち Qarāyalik の詳しい傳記と Ḥamza 以降の Qarāyalik 族の歴史の概要である。また、これは ar-Rawḍ の傳記部分の敘述の一つの特徴である表題の人物の傳記部分に比べて関連する事柄や人物について敘述している部分が多いことの一例である。

ダマスカスの ḥajīb al-ḥujjāb の 5. Sūdūn an-Nawrūzī (通し番號14) は、Inbā'(T) 本文になく無署名の短い書き込みにある。この人物については没年を848年とした史料は見つからなかった。

ガザのナーイブ 6. Ṭukh al-Abūbakrī (通し番號15) と dawādār の 7. Ṭūghān (通し番號16) について ar-Rawḍ では2名とも実際は849年に没したのだが、この年に没したと誤って述べている (wahama) 者がいるので項目を立てたと記している。ar-Rawḍ で名を挙げずに非難されている人物は多くの場合イブン・タグリービルディーであるが、はたして 6. については Inbā'(T)

本文になく無署名の書き込みがあり、また an-Nujūm (表2の欄10) は848年と傳えている。7. については Inbā'(T) になく an-Nujūm にもないことから、at-Tibr からの情報と思われるが、6. と同時に亡くなったのでここに含めた。没年の相違の内容を読むと848年 Dhu'l-Hijja 月と翌月849年 Muḥarram 月との差であって、傷を負って何日後に死んだのかは微妙であったために、史料によって没年の相違が生じたと思われる。イブン・タグリービルディー自身も別の書物では849年と記している。

著名な説教師 9. 'Abd ar-Raḥīm b. Abī Bakr, Zayn ad-Dīn (通し番號20) の記述については幾つかの問題点が浮かび上がってくる。先ず ar-Rawḍ は、
 「'Abd ar-Raḥīm b. Abī Bakr b. Muḥammad b. 'Alī b. Abī al-Faṭḥ b. al-Muwaffaq al-Ḥamawī al-Qādirī al-Qāhirī ash-Shafī'i, ash-Shaykh Zayn ad-Dīn. イブン・ハジャルはうっかりされて (sahā) 彼の父の名前 (イスマ) を 'Alī, ラカブは Nāṣir ad-Dīn とされている。イブン・タグリービルディーはイスマもラカブも間違っていて (wahama), Shams ad-Dīn Muḥammad としている。」と敘述を始めている。Inbā'(T) の本文では、父のイスマを 'Alī, ラカブを Nāṣir ad-Dīn としている。Inbā'(H) と Inbā'(C) はともに、父のイスマを 'Alī, ラカブは Zayn ad-Dīn としている。この ar-Rawḍ の記述は、Inbā'(T)こそ著者が讀んだ寫本であることを示している例證の一つである。イブン・タグリービルディーが Shams ad-Dīn Muḥammad と呼んでいるのは、an-Nujūm (表2の欄10) の記述にある。at-Tibr は ar-Rawḍ と同じく父の名前は Abū Bakr である。従ってここでは、著者は Inbā'(T) の本文を讀み an-Nujūm の情報を批判的に取り入れ at-Tibr 等を参照して敘述したことが判る。また Inbā'(T) の餘白部分の彼の署名のある書き込みはこの人物の息子 Maḥmūd とやはり評判が高かった孫 Ibrāhīm についての情報であり、行文を變えながら殆ど同内容が ar-Rawḍ にある。

さて表3には16と17の間に挙げた Muḥammad al-Ḥamawī (通し番號35) はこの 9. と同一人物であると考えられる。彼のことは Inbā'(T) には署名のない二種類の書き込み部分にみえる、はじめに彼の傳記情報を簡単に述べているが、續けて別人の筆でこれはこの 'Abd ar-Raḥīm であると書き込まれている。

る。従って ar-Rawḍ は、この人物は採録していない。Inbā'(C) は、al-Biqā'i の書き込みがある al-Maktabat as-Sa'idiya 所蔵寫本にはないがと脚注に注記して本文に Muḥammad al-Ḥamawī の短い傳記情報を校訂している。また脚注には前述 an-Nujūm の同じ箇所を史料として示している⁶²。校訂された本文にもカッコにいれて「'Abd ar-Raḥīm で先にでている、彼の名前は先に書かれた」という部分があり、校訂者はこの意味は不明としているが、私はこの傳記の記述内容は 9. と異同は幾つかあるが要約であると考えている。特に没した日を Dhu'l-Qa'da 月 3 日水曜日としている點が 9. の記述と違っているが、'Iqd が 9. の没した日を全く同じ日として曜日まで一致して傳えていることも根據になるのではないかと考えている⁶³。また Inbā'(H) には、この人物の傳記は記載されていない。また Nuzhat がこの名前で情報を傳えているのは 'Iqd や an-Nujūm からの情報をまとめる段階で an-Nujūm の記述を中心として記述したためと考えられる⁶⁴。

スルターン al-Mu'ayyad Shaykh の杯持ち (sāqī) 11. Fayrūz aṭ-Ṭawāshī (通し番號27) については、Inbā'(T) では、餘白に無署名の書き込みと署名のある書き込み部分にみられる。署名のある部分は 'Iqd からの引用部分で、その部分は ar-Rawḍ の文中の該當部分に文意が明瞭になるように分けて引用されている。また「ある者が述べているが」として an-Nujūm の一部を引用している⁶⁵。

シャーフィイー派の法學者で詩人である 12. Muḥammad b. Aḥmad (通し番號29) は Inbā'(T) の本文に長文の傳記が書かれており、餘白に無署名の書き込み部分がある。ar-Rawḍ には Inbā' からと明記して多くの部分を引用している。詩の引用に注目すると Inbā' には彼の詩は引用されていないが、ar-Rawḍ と at-Tibr を比べると 3 つの詩の内 1 つのみ共通であることから、ar-Rawḍ が at-Tibr をそのまま引用しているのではないことが推察される。

⁶² 表 2 の通し番號35の欄10参照、通し番號20 (すなわち 9) の欄10と比較。

⁶³ 表 2 の通し番號20の欄 9 参照、'Iqd は 'Abd ar-Raḥīm al-Wā'iz al-Ḥamawī と名前を挙げているのみ。

⁶⁴ 表 2 の通し番號35の欄 7 参照、彼は Shams ad-Dīn al-Ḥamawī al-Wā'iz とのみ名前を挙げている。

⁶⁵ 表 2 の通し番號27の欄 9 と欄10参照。

また Bada'i' と比べると 3つの内 2つが共通している⁸⁹。

三つめのグループは以下の 2名の記事である。シャーフイー派シャイフ 15. Muḥammad b. 'Alī (通し番號33) については、著者自身良く知らないが、ただこの年メッカで没したとされていると傳えている。今のところこの人物についての記述は他の史料に見つけることができなかった。18. (通し番號39) は前述した著者の異腹の兄の記事である。

以上 ar-Rawḍ の傳記部分を Inbā'(H) と Inbā'(C) の 2つの校訂本とアブドル＝バースィトが実際に讀んだ Inbā'(T) の本文を、Inbā'(T) の餘白の書き込み部分の記述を鍵としてそれぞれの敘述を比較することによって、どのように著者が情報をまとめて19名の傳記を記述したかを検討した。表 2 を説明して概略を示したその成立過程の情報の流れの一端を跡づけることができたと考ええる。

特徴としては、著者が当該人物を知る人から情報を集めていることで、人物やその時代を生き生きと物語風に描いていること、またそれと表裏一體のことであるが著者の個人史が浮かび上がる部分があることがあげられる。またトルコ人の名前の意味を解説していることも特色と言えよう。ウラマーの子弟関係の情報については at-Tibr が優っているが、それは著者の関心のありようを反映しているのか、あるいは彼が利用できた資料が現在刊行されている at-Tibr よりは情報量の少ないものであったためかとも考えられる。ちなみに ar-Rawḍ が傳えていない表 2 の通し番號の 3, 8, 9, 18, 26, 36の傳記情報について、アッサハーウィーは、メッカの情報に詳しい Ibn Fahd が記していると述べているが、この記述から ar-Rawḍ 執筆時に利用できた「アッサハーウィーの歴史」は Ibn Fahd からの情報が盛り込まれていないものであったと考えられるのではないか。また ar-Rawḍ が伝える17名は著者が執筆した当時のカイロの知識人で傳記情報を調べる者に把握されていた数と言えるかもしれない。

⁸⁹ 表 2 の通し番號29の欄 4 と欄 5 また欄11参照。

五 お わ り に

イブン・ハジャルの歴史書 *Inbā'* の一つの寫本であるトプカプ所藏寫本 (III Ahmet 2942/2) (*Inbā'*(T)) はアブドル＝バースィトが實際手にとって利用した寫本であり、彼はこの寫本の餘白部分に他の史料からの情報や自身の調査の成果を書き込んだ。本稿は特にその書き込み部分に加えられた情報を検討して、著者がどのように *Inbā'* の情報を *ar-Rawḍ* に盛り込んだのかを追跡した。先ず著者あるいは別人によって書き込まれた情報は、*an-Nujūm* を主としたイブン・タグリービルディーの情報であったこと、次に 'Iqd から情報とともに彼自身の傳聞やその他の情報をつけ加えていることが確認できた。また *ar-Rawḍ* の該当部分を検討すると、この書き込み部分の情報が日附と記述内容の基礎の一つであることが検証された。それを詳細に検討すると、本稿で対象とした1年の記述には、日附が間違っていて書かれた、あるいは書寫されたこと、またその誤りはイブン・イヤースの記述に引き継がれていることが判明した。

Inbā'(T) の傳記部分については、本文に觸れられていない人物の傳記情報が、書き込まれているが、そのなかには明らかに *an-Nujūm* からと思われる情報もある。この部分でも、アブドル＝バースィトが情報を附加しているために、傳記を掲載されている人物の息子あるいは孫という執筆當時現存している人物の傳記ともなっている。この *Inbā'*(T) の傳記部分の本文と餘白部分に挙げられている人物が全て *ar-Rawḍ* に記載されていることと敘述内容からも、*ar-Rawḍ* の傳記部分の敘述の基礎となっていることが明らかとなった。*ar-Rawḍ* の傳記部分はそれに加えてアッサハーウィーからの情報を主として書かれた。

ar-Rawḍ の年代記部分と傳記部分兩方には、個人史ともいふべき著者の家族の動向が *Inbā'*(T) の餘白部分の書き込みから取捨選擇されて盛り込まれている。

アブドル＝バースィトに師事したイブン・イヤースが伝える彼の傳記情報に

は、生前の彼の様子が描かれている⁸⁷⁾。彼は歴史書において、Khalil b. Shāhīn を述べるときに、「彼は ar-Rawḍ al-Bāsim という歴史書の著者の父」と表現したり、またその他の記事の中にも「彼の父」という表現を用いている⁸⁸⁾。しかしアブドル＝バースィトの名前が言及されている記事を検討してみると、管見では一箇所を除いて全て彼の作った詩の引用部分である⁸⁹⁾。そのためカイブン・イヤーヌに与えた具体的な影響についてはこれまで検討されていなかったと言えよう。しかし本稿で一年のみを検討しただけであるが、枠組みである日附はもとより出来事の記述と傳記の情報には ar-Rawḍ の敘述が強く反映していることが明らかとなったと考える。また逆に ar-Rawḍ が対象とする年代の Badā'i' の記述は缺落部分の多い ar-Rawḍ を検討するときに参考とすることができる。

アブドル＝バースィトの師の一人アッサハーウィーは、彼の學問の旅、彼が教えを受けた先生やマグリブへの旅を述べた後に「彼は多くの分野において優れており、著述をしたり詩を詠み、また歴史に関心を向けるようになった」と述べ、「その面では多くのことを私に負っておりしばしば私を訪問している」と述べている⁹⁰⁾。

本稿で検討したことから、少なくともアブドル＝バースィトが ar-Rawḍ を執筆していたときに利用したアッサハーウィーの歴史書は、現在我々が手にしている書物よりも情報量の少ないものであって、この後に現在ある形になったと推察され、彼の歴史書の形成過程も浮かび上がってくるのではないかと考えられる。

史料と主要な参考文献

寫本

- Inbā' (T): Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr bi-Anbā' al-'Umr*, Topkapı Saraylı Müzesi kütüphanesi, III Ahmet, 2941/2.
Majma': 'Abd al-Bāsiṭ, *Majma' al-Mufannan bi-l-Mu'jam al-Mu'anwan* Mak-

⁸⁷⁾ Badā'i', IV, 373-3.

⁸⁸⁾ Badā'i', II, 153, 169, 172, 174, 176, 177, 205, 215, 254, 375, 448; III, 25.

⁸⁹⁾ Badā'i', III, 263, 318, 424-5, 455-56; IV, 83-4.

⁹⁰⁾ aḍ-Ḍaw', IV, 27.

- tabat Baladiyat al-Iskandariya, 4448/800b, musalsal 5 tārīkh.
 Nayl: 'Abd al-Bāsiṭ, *Nayl al-Amal fī Dhayl ad-Duwal*, Bodleian Library, MS. Hunt. 285, Hunt. 610 (Uri Arab. Moh. 802, 812. Nicoll. p. 596).
 ar-Rawḍ: 'Abd al-Bāsiṭ, *ar-Rawḍ al-Bāsim fī Ḥawāḍith al-'Umr wat-Tarājim*, Vatican Arabo, 728, 729.

刊行史料

- Badā'i': Ibn Iyās, *Badā'i' az-Zuhūr fī Waqā'i' ad-Duhūr*, ed., by M. Muṣṭafā, 6 vols, Wiesbaden, 1960-75. Indices, 6 vols, Stuttgart, 1984-92.
 ad-Dalīl: Ibn Taghrī Birdī, *ad-Dalīl ash-Shāfi 'ala-l-Manhal aṣ-Ṣāfi*, 2 vols, ed. by Fahīm Muḥammad Shaltūt, Makka, 1399/1979. rep. al-Qāhira, 1998.
 aḍ-Ḍaw': as-Sakhāwī, Shams ad-Dīn, *aḍ-Ḍaw' al-Lāmi' li-Ahl al-Qarn at-Tāsi'*, ed. by Ḥuṣām ad-Dīn al-Qudsi, 12 vols, al-Qāhira, 1353-5/1934-6, (rep., Bayrūt, n. d.).
 adh-Dhayl: as-Sakhāwī, Shamsa d-Dīn, *adh-Dhayl at-Tamm 'alā Duwal al-Islām l-dh-Dhahabī*, vol. 1, ed. by Ḥasan Ismā'īl Murūwa and Maḥmūd al-Arnā'ūt, Bayrūt and al-Kuwayt, 1413/1992.
 Ḥawāḍith: Ibn Taghrī Birdī, *Ḥawāḍith ad-Duhūr fī Madā al-'Ayyām wa-sh-Shuhūr*, ed. by Muḥammad Kamāl ad-Dīn 'Izz ad-Dīn, Bayrūt, 1410/1990.
 Inbā' (C): Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr bi-Anbā' al-'Umr*, ed. by Ḥasan Ḥabashī, 4 vols., al-Qāhira, 1969-98.
 Inbā' (Ḥ): Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr bi-Anbā' al-'Umr fi-t-Tārīkh*, 9 vols, Ḥayderabad, 1967-76. (rep., Bayrūt. 1406/1986).
 Inbā' (D): Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr bi-Anbā' al-'Umr*, ed. by Muḥammad Aḥmad Dahmān, vol. 1, Dimashq, 1399/1979.
 'Iqd: al-'Aynī, *'Iqd al-Jumān fī Tārīkh Ahl az-Zamān*, ed. by 'Abd ar-Rāziq at-Ṭanṭāwī al-Qarmūt, 2 vols, al-Qāhira, 1406-9/1985-9.
 al-Manhal: Ibn Taghrī Birdī, *al-Manhal aṣ-Ṣāfi wa-l-Mustawfi ba'da -l-Wāfi*, vol. 1-8, ed. by Muḥammad Muḥammad Amīn, al-Qāhira, 1985-99.
 an-Nujūm: Ibn Taghrī Birdī, *an-Nujūm az-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa-l-Qāhira*, 12 vols, al-Qāhira, 1929-56.
 Nuzhat: Ibn Dāwūd aṣ-Ṣayrafi, *Nuzhat an-Nufūs wa-l-'Abdān fī Tawārīkh az-Zamān*, ed. by Ḥasan Ḥabashī, 4 vols, al-Qāhira, 1970-94.
 Shadharāt: Ibn Imād, *Shadharāt adh-Dhahab fī Ahbār man dhahaba*, ed. by 'Abd al-Qādir al-Arnā'ūt and Maḥmūd al-Arnā'ūt, 11 vols, Bayrūt, 1406-16/1986-95.
 at-Tibr: as-Sakhāwī, Shams ad-Dīn, *at-Tibr al-Masbūk fī Dhayl as-Sulūk*, Būlāq, 1896. (rep., al-Qāhira, 1974).

Wajīz: as-Sakhāwī, Shams ad-Dīn, *Wajīz al-Kalām fi-dh-Dhayl ‘alā Duwal al-Islām*, 4 vols, ed. by Bashshār ‘Awwād Ma‘rūf et al., Bayrūt, 1416/1995.

研究

Brunschvig, R. (1936): Brunschvig, Robert, *Deux Récits de Voyage inédits en Afrique du Nord au XV e siècle*, Paris, 1936.

rep., Frankfurt am Main, 1994, (Publications of the Institute for the History of Arabic-Islamic Science, Islamic Geography, vol.187).

‘Izz ad-Dīn (1990): ‘Izz ad-Dīn, Muḥammad Kamāl ad-Dīn, *‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī mu‘arrifan*, Bayrūt, 1410/1990.

Levi Della Vida (1933): Levi Della Vida, “Il regno di Granata nel 1465-66 nei ricordi di un viaggiatore egiziano” *al-Andalus*, 1 (1933), pp.307-334.

テキスト部分の pp.325-26 を再録したものに

Melville, Ch. and Ubaydli, A., *Christians and Moors in Spain*, vol. III (*Arabic Sources*), Warminster, 1992, pp.172-5.

Martel-Thoumian, B. (1991): Martel-Thoumian, B., *Les Civils et l’Administration dans l’État Militaire Mamlūk (IXe/XVe siècle)*, Damas, 1991.

表1 年代記部分の記事の比較

(8) Badāʾi, vol. 2	(7) ar-Tibr	(6) ar-Rawḍ	(5) Nuzhat an-Nufuṣ, vol. 4	(4) ʿIqd	(3) an-Nujūm vol. 15(N) と Hawāḍith (H)	(2) Inbāʾ(T)	(1) Inbāʾ, vol. 9(H) vol. 4(C)
al-Muḥarram 月初旬 疫病の流行	al-Muḥarram 月初旬 疫病の流行 (p. 87) 12日(金) ムフタシブ Bāz ʿAlī al-ʿAjami プーラクの油 圧搾所の騒 動鎮圧(p. 87)	al-Muḥarram 月初旬 疫病の流行 12日(金) ムフタシブ ʿAlī al-ʿAjami プーラクの油 圧搾所の騒 動鎮圧 同月 ロードス島 遠征軍編 成。 タミエッタ からアレキ サンドリア に艦船の移 動。 22日 ロードス島 遠征軍アレ キサンドリ アから出 航。12日 前にタミエ ッタからア レキサンド リアに艦の 移動完了 (p. 87) <A>	al-Muḥarram 月初旬 疫病の流行 (p. 298) 12日(金) ムフタシブ Yāz ʿAlī al-ʿAjami al-Khurāsānī プーラクの 油圧搾所の 騒動鎮圧 (p. 298)	al-Muḥarram 月初旬 疫病の流行 (p. 620) 12日(金) ムフタシブ Yāz ʿAlī プーラクの油 圧搾所の騒 動鎮圧 (p. 620)	al-Muḥarram 月初旬 疫病の流行 12日(金) ムフタシブ Yāz ʿAlī al-Khurāsānī プーラクの 油圧搾所の 騒動鎮圧(H p. 104) Šafar月 疫病の流行 が猖獗を極 めた (N p. 359)	al-Muḥarram 月初旬 疫病の流行 22日(月) ロードス島 遠征軍アレ キサンドリ アから出 航。12日 前にタミエ ッタからア レキサンド リアに艦船 の移動完了 (H p. 220/C p. 224) <A>	al-Muḥarram 月初旬 疫病の流行 (H p. 219- 20/C p. 224)
	Šafar月 2日(木) ワクフ監督 官 Ibn az-Zuhayr任 命(p. 87)	Šafar月 2日(木) ワクフ監督 官 Ibn az-Zuhayr任 命 3日(金) 激しい風 雨。疫病の 終息を予期		Šafar月 2日(木) ワクフ監督 官 Ibn az-Zuhayr任 命(p. 620)	2日(木) ワクフ監督 官 Ibn az-Zuhayr任 命(H p. 104)		Šafar月 3日(金) 激しい風。 疫病の終息 を予期 (H p. 220/C p. 224)

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
	5日(日) Ibn Hajar病 床につく が、後快復 (p.87)	5日(日) Ibn Hajar病 床につく が、後快復。 疫病の終息 21日(火) Kasbāyを Şafadに追 放。スルタ ーンのマム ルーク Shāhīn追放	21日(月) Kasbāyを Şafadに追放。 スルター ンのマム ルーク Shāhīn追放 (p.299)	21日(月) Kasbāyを Şafadに追放。 スルター ンのマム ルーク Shāhīn追 放(p.620)	21日(火) Kasbāyを Şafadに追放 (N.p.359)	Şafar月 Kasbāyを Şafadに追放	5日(日) 著者病床に つくが、後 快復。疫病 の終息 (H.p.220- 1/C.p.224)
	ar-Rabi' 1月 5日(月) Ibn al-ʿAṣṣar 事件 (p.90, cf. ad- Dawḥ, vol.2, p.115-7) 	ar-Rabi' 1月 1日(木)= Būna月24日 2日(金) (1日とする 者を批判) Yūnus追放。 ミクヤース 測量 3日(土) ナイル川増 水と告知(4 日)。 ヒジャーズ 情報の到 着。疫病終 息。 5日(月) Ibn al-ʿAṣṣar 事件 	ar-Rabi' 1月 1日(金) Yūnus追放 (p.299)	ar-Rabi' 1月 1日(金) Yūnus追放 (p.621)	ar-Rabi' 1月 1日(金) Yūnus追放 (H.p.104) 3日(日) Muḥibb ad-Dīn al-Haythamī 事件 (H.p.104) <E> 疫病終息 (N.p.359) (H.p.104) 同月 Ibn al-ʿAṣṣar 事件 (H.p.104- 5/N.にはな し) 9日(土) Tuḡhānのマ ムルーク Sūdūnアレ ッポに追放 (H.p.104) <F>		ar-Rabi' 1月 1日(木)= Būna月24日 2日(金) ミクヤース 測量 (H.p.221/C.p 225) 3日(土) ナイル川増 水とその告 知(4日)。 ヒジャーズ 情報の到 着。疫病終 息 (H.p.221/C.p 225)

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
		17日(土) ロードス島 遠征軍出 航。従軍し た人物につ いての疑問 同日 Sūdūn as-Sūdānを Qūṣに追放 <C> 27日(火) Sa'd ad-Dīnの 息子倒壊し た壁の下敷 きとなって 死亡(p.90) <D>			16日(上) ロードス島 遠征軍出 航。軍の編 成。(N p.360) 同日Sūdūn as-Sūdān をQūṣに追 放 (N p.360/H p. 104) <C>	16日 ロードス島 遠征軍出 航。従軍し た人物につ いての疑問 同日 Sūdūn as-Sūdānを Qūṣに追放 <C>	30日(火) Sa'd ad-Dīn の息子倒壊 した壁の下 敷きとなっ て死亡 (H p.221/C p. 225) <D>
ar-Rabī' II月 Ibn al-ʿAṭār 事件 (p.242) Sa'd ad-Dīnの 息子倒壊し た壁の下敷 きとなって 死亡(p.242) <D>	ar-Rabī' II月 1日(金) 3日(日) Muḥibb ad-Dīn事件 と Ibn Ḥajar (pp.90-1) <E> 「Rabī' II月 でこの事件 を伝えている 者がいる が間違いで ある」 3日 Tūghānのマ ムルークの Sūdūn アズハル・ モスクのナ ーズィル職 免職 <F>	ar-Rabī' II月 1日(金) 3日(日) Muḥibb ad-Dīn事件 と Ibn Ḥajar <E>	ar-Rabī' II月 1日(金) 3日(日) Muḥibb ad-Dīn事件 と Ibn Ḥajar (p.300-1) <E> 3日 Tūghānのマ ムルークの Sūdūn al- Ashqur アズハル・ モスクのナ ーズィル職 免職 (p.299) <F>	ar-Rabī' II月 1日(金) 3日(日) Muḥibb ad-Dīn事件と Ibn Ḥajar (p.622) <E> 3日 Tūghānのマ ムルークの Sūdūn アズハル・ モスクのナ ーズィル職 免職。アレ ッポに追放 (P.621) <F>	ar-Rabī' II月 1日(上) Muḥibb ad-Dīn事件 に関連し て、この人 物評と父 Khalīlと ar-Rūmīとの 関係、Qadī 引用部分もあ り <E>	ar-Rabī' II月 1日(金) 3日(日) Muḥibb ad-Dīn 事件と著者 <E> 15日(木) 事件落着。 (H p.221- 2/C p.225-6)	

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
	4日(月) Qānsuwa an-Nawrūzī が、マラテ ィーヤのナ ーイブに、前 任者Mīr Tūghānはア レッポのア ターバクに、 そしてその 前任者の Khalīl b. Shāhīnは追 放 <G>		3日 Qānsuwa が、 マラティー ヤのナーイ ブに前任者 Qīz Tūghān はアレッポ のアターバ クであった (p.302) <G>	4日(月) Qānsuwa が、 マラティー ヤのナーイ ブに前任者 Qīz Tūghān はアレッポ のアターバ クに <G>	3日(月) Qānsuh an-Nawrūzīが、 マラティー ヤのナーイ ブ。前任者 Qīz Tūghān はアレッポ のアターバ クに (H.p.106/N.p. .363) 前任者の Khalīl b. Shahinの追 放(N.p.363) <G>	3日 Qānsuwa an-Nawrūzī が、マラテ ィーヤのナ ーイブに、 前任者は、 父の後任Qīz Tūghānであ った。同年 父はアレッ ポのアター バク職を免 ぜられ後任 はQīz Tūghān <G>	
	4日 Sūdūn al- Muhammadi ダマスカス 城塞のナー ーイブに、前 任者Jānbak an-Nāsinīは ダマスカス の大ハージ ブに <H>		3日 Sūdūn al- Muhammadi ダマスカス 城塞のナー ーイブに、前 任者Jānbak an-Nāsinīは ダマスカス の大ハージ ブに(p.301) <H>	4日 Sūdūn al- Muhammadi が、ダマス カス城塞の ナーイブに、 また、ダマ スカスの大 ハージブ職 兼務(p.623) <H>	3日 Sūdūn al- Muhammadi ダマスカス 城塞のナー ーイブに、前 任者Jānbak an-Nāsinīは ダマスカス の大ハージ ブに (N.p.363/H.p. .105)<H>	3日 Sūdūn al- Muhammadi ダマスカス 城塞のナー ーイブに、前 任者Jānbak an-Nāsinīは ダマスカス の大ハージ ブに <H>	
	4日 al-Kunūz族 討伐の遠征 軍上エジプ トに向かう		3日 al-Kunūz族 討伐の遠征 軍上エジプ トへ(p.302) 4日(月) Sūdūn al- Burdakī ダミエッタ のナーブ。 前任者 Tūghānはシ リアに向か う(p.303) 5日(火) Dūlāi Bāy アズハル・ モスクのナ ーズイルに 任命 8日(金) 著者が商人 の娘と Ibn Hajarのもと で結婚契約	4日 al-Kunūz族 討伐の遠征 軍上エジプ トに向かう (p.623)	3日 al-Kunūz族 討伐の遠征 軍上エジプ トに向かう (H.p.106)		
	5日(火) Dūlāi Bāy アズハル・ モスクのナ ーズイルに 任命 8日(金) 著者が商人 の娘と Ibn Hajarのもと で結婚契約		5日(火) Dūlāi Bāy アズハル・ モスクのナ ーズイルに 任命 (p.302)	5日(火) Dūlāi Bāy アズハル・ モスクのナ ーズイル に任命 (P.621)			

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
	<p>9日(上) Sūdūn as-Sūdūnを Qūsへ追放。 最終的には アレッポに 追放 <C></p> <p>18日(月) Sūdūn al-Burdhaki タミエッタ のナーイブ。 前任者 Tūghānはシ リアに向か う 19日(火) ナイル川の 満水 (p.90-93) <I></p>		<p>9日(上) Sūdūn as-Sūdūnを Qūsへ追放。 最終的には アレッポに 追放 (p.299)<C></p> <p>19日 ナイル川の 堰を切る (p.312) <I></p>	<p>9日(上) Sūdūn as-Sūdūnを Qūsへ追放。 最終的には アレッポに 追放 (p.621)<C></p> <p>18日(月) Sūdūn al-Burdhaki タミエッタ のワーリー に。前任者 Tūghānはシ リアに向か う(p.623) 19日(水) ナイル川の 堰を切る (p.632) <I></p>	<p>11日(木) ロードス島遠 征軍。シリア の兵士と合流 するためにタ ラップルスに 向かってアレ キサンドリア とタミエッタ から出航 (N p.361) 15日(土) Sūdūn al-Burdhaki タミエッタの ナーイブに。 前任者Tūghān はシリアに 向かう (H p.106) 18日(火) Dūlā Bay アズハル・モ スクのナース イルに任命 (H p.106) ar-Raḥī 11月 ナイル川の満 水 (H p.106-7) <I></p>		<p>19日(火)ナ イル川の堰 を切る (19日(火) C.p.226/ 9日(火) H.p.222-3) <I> 24日 ロードス島 遠征軍上 陸。(al Jumādā I 月 7日に情報 を得る) (H p.223- 4/C.p.226-7)</p>
		<p>al-Jumādā I 月2日(月)「3 日は誤り」 Sūdūn al- Muḥammadī タマスカス 城塞のナー イブに。前 任者Jūnbak an-Nāṣūfは タマスカス の大ハージ ブに <H></p>		<p>al-Jumādā I 月2日(月) ʿAlī b. Aqbārが ワクフ監督 官に。前任 者Ibn Zuhayra (p.620)</p>	<p>「al-Jumādā I 月と al-Jumādā II 月には何も起 きなかった。」 (H p.107)</p>		

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
	ロードス島 遠征軍の戦況 (p.89, Muharram月 の項目にま とめて) 28日 メッカの カーティ ーに、Ibn Hajar の弟子 Burhān ad-Dīn 任命(p.94)	4日(木) (マ マ) ロードス島 遠征軍の戦 況	al-Jumādā I 月 20日(木) Ibn Hajarが アムル・モ スクのナ ースイル、 前任者Fayrūz ar-Ruknī (p.303)	15日(木) Ibn Hajarが アムル・モ スクのナ ースイル、 前任者Fayrūz ar-Ruknī	ロードス島 遠征軍の戦 況 (N.p.361-3)		al-Jumādā I 月9日付け のロードス 島遠征軍の 戦況報告届 く (H p.223- 4/C p.226- 7)
al-Jumādā II 月 マラティ ーヤのナ ーイブに Qānṣuwa an-Nawrūz, 前任者Qiz Tughānはア レppoの アターバク に (vol.2, p.242) <G>		al-Jumādā II 月2日(月) マラティ ーヤのナ ーイブに Qānṣuwa an-Nawrūz, 前任者Qiz Tughānはア レppoの アターバク に、その前 任者の著者 の父Kūlīl b. Shāhīnは 入牢、Ibn Hajar等の奔 走の結果解 放され、ハ リールに 戻る <G>					
al-Jumādā II 月 ナイル川 満水(p.242) <I> ロードス島 遠征軍74サ トリア帰還 (p.243)	al-Jumādā II 月末 ロードス島 遠征軍帰還 (p.94)	月末 ロードス島 遠征軍への 援軍到着の 前に本隊が アレキサン ドリア帰還					al-Jumādā II 月末 ロードス島 遠征軍帰還 (H p.22/ C p.227)

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
	Rajab月2日 (木) ある いは3日 al-Kunūz遠 征軍凱旋 (p.94)	Rajab月 2日(木) Rabī 11月に 派遣したal- Kunūz遠征 軍凱旋	Rajab月 2日(木) al-Kunūz遠 征軍凱旋 (p.303)	Rajab月2日 (木) al-Kunūz遠 征軍凱旋 (p.624)	Rajab月 2日(木) al-Kunūz遠 征軍凱旋 (H p 107)		
Rajab月 4日 ハマーの ナীব Burdak al-ʿAjami アレキサン ドリアで入 宰。後任に サファドの ナীব Qānbāy al- Bahlawān. サファドの ナীবに はBayghūtを 任命(p.243)	5日(上) あるいは4 日 (ʿiqdを引用) ハマーの ナীব Burdak al-ʿAjami アレキサン ドリアで入 宰。後任に サファドの ナীব Qānbāy al- Bahlawān. サファドの ナীবに はBayghūtを 任命 のナীবに はホームスの ナীব Bayghūtを任 命 (p.94)	4日 ハマーの ナীব Burdak al-ʿAjami アレキサン ドリアで入 宰。後任に サファドの ナীব Qānbāy al- Bahlawān. サファドの ナীবに はBayghūtを 任命	4日 ハマーの ナীব Burdak al-ʿAjami アレキサン ドリアで入 宰。後任に サファドの ナীব Qānbāy al- Bahlawān. サファドの ナীবに はBayghūtを 任命 (p.304)	4日 ハマーの ナীব Burdak al-ʿAjami アレキサン ドリアで入 宰。後任に サファドの ナীব Qānbāy al- Bahlawān. サファドの ナীবに はBayghūtを 任命 (p.625)	4日(土) ハマーの ナীব Burdak al-ʿAjami アレキサン ドリアで入 宰。後任に サファドの ナীব Qānbāy al- Bahlawān. サファドの ナীবに はBayghūtを 任命 (N.15 p.3634 H p.107-8)	Rajab月 4日(土) ハマーのナ ীব Burdak al-ʿAjami アレキサン ドリアで入 宰。後任に サファドの ナীব Qānbāy al- Bahlawān. サファドの ナীবに はBayghūtを 任命 (N.15 p.363- 4あるいは ʿiqdを引用)	Rajab月初旬 Rajab月の巡 礼団出発 Burhān ad- Dīn同行 (H p.224/C.p. .227)
Rajab月初旬 Rajab月の巡 礼団出発 (p.243) マフマル巡 行に際して 危険とのこ とで槍騎兵 の参加禁止 (p.243) 12日(木) ロードス島 遠征軍カイ ロ入城 (p.243)	Rajab月初旬 Rajab月の巡 礼団出発。 Ibn Hajarの 弟子Burhān ad-Dīn同行。 マフマル巡 行に際して 危険とのこ とで槍騎兵 の参加禁止 12日(木) ロードス島 遠征軍カイ ロ入城 (p.95-6)	Rajab月初旬 Rajab月の巡 礼団出発 Ibn Hajarの 弟子Burhān ad-Dīn同行。 マフマル巡 行に際して 危険とのこ とで槍騎兵 の参加禁止 12日(木) ロードス島 遠征軍カイ ロ入城			マフマル巡 行に際して 危険とのこ とで槍騎兵 の参加禁止 Shawwāl月 に行う予定 としたが再 び禁止 (N.p.366/H p. .111) 12日(木) ロードス島 遠征軍カイ ロ入城 (N.p.363)		
	Shaʿbān月 12日(日) ʿAlī Bāyシリ ア追放を許 されてカイ ロに (p.96)	Shaʿbān月 12日(日) ʿAlī Bāyシリ ア追放を許 されてカイ ロに	Shaʿbān月 12日(月) ʿAlī Bāy, ダミエッタ から出獄し て、カイロ に。(p.305)	Shaʿbān月 12日(月) ʿAlī Bāyシリ ア追放を許 されてカイ ロに(p.626)	Shaʿbān月 12日(月) ʿAlī Bāyシリ ア追放を許 されてカイ ロに (H p.108)		

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
<p>Shābān月 15日(木) シャー・ル フの使節と キスワ (p.244)<J></p> <p>ディーヤー ルバクルで Qarāyārikと して知られ るJahānkīrが 権力掌握 (Rajab月の 項目で、 p.243)</p>	<p>14日(木) シャー・ル フの使節と キスワ (p.96) <J></p> <p>19日(月) Bahā' ad-Dīn カイロ到着 (p.96)</p> <p>20日(木) アレppoの ナーイブ Qānī bāy馬等 を献上(p.96、 Qāyubāyとあ る)</p>	<p>15日(木) シャー・ル フの使節 カイロ到着 とキスワ <J> 同月 ディーヤー ルバクルで Qarāyārikと して知られ るJahānkīr が権力掌握</p> <p>19日(月) Bahā' ad-Dīn カイロ 到着</p>	<p>20日(月) Bahā' ad-Dīn カイロ 到着 (p.305)</p> <p>21日(火) アレppoの ナーイブ Qānī bāy馬 等を献上 (p.305)</p>	<p>14日(木) シャー・ル フの使節 カイロ到着 とキスワ (p.627) <J></p> <p>20日(月) Bahā' ad-Dīn カイロ到着 (p.626)</p> <p>21日(火) アレppoの ナーイブ Qānī bāy馬 等を献上 (p.626)</p>	<p>15日(木) シャー・ル フの使節 カイロ到着 とキスワ (N.p.364/ H.p.109) <J></p> <p>19日(月) Bahā' ad-Dīn 到着 (H.p.108)</p> <p>21日(火) アレppoの ナーイブ Qānī bāy馬 等を献上 (H.p.108)</p>	<p>Shābān月 15日 シャー・ル フの使節 カイロ到着 とキスワ <J></p>	
<p>Ramādān月 シャー・ル フの使節の 登城と使節 に対する略 奪事件 (p.244-5) <J></p>	<p>Ramādān月 11日(日) シャー・ル フの使節の 登城と使節 に対する略 奪事件 (p.96-8) <J></p>	<p>Ramādān月 11日(日) シャー・ル フの使節の 登城と使節 に対する略 奪事件 <J></p>	<p>Ramādān月 4日(木) シャー・ル フの使節の 到着(p.306) 12日(月) 使節の登城 と使節に対 する略奪事 件 (p.306-8) <J></p>	<p>Ramādān月 12日(月) シャー・ル フの使節の 登城と使節 に対する略 奪事件 (p.627-8) <J></p>	<p>Ramādān月 11日(月) シャー・ル フの使節の 登城と使節 に対する略 奪事件 (N.p.365/H.p. .109-110) <J></p>	<p>Ramādān月 シャー・ル フの使節の 登城と使節 に対する略 奪事件 <J></p>	
<p>Shawwāl月 オスマン朝 ムラトII世 の使節到着 (p.245-6) <K></p>	<p>Shawwāl月16 日(月) オスマン朝 ムラトII世 の使節到着 (p.98-100) <K></p>	<p>Shawwāl月 始め オスマン朝 ムラトII世 の使節到着。 Banū al-Asfarを破 ったと報告 <K></p>	<p>Shawwāl月 16日 オスマン朝 ムラトII世 の使節到着 (p.308-9) <K></p>	<p>Shawwāl月 16日(月) オスマン朝 ムラトII世 の使節到着 (p.629) <K></p>	<p>Shawwāl月 16日(月) オスマン朝 ムラトII世 の使節到着 (N.p.366/H.p. .110-1)<K></p>	<p>Shawwāl月 オスマン朝 ムラトII世 の使節到着。 Banū al- Asfarを破っ たと報告 <K></p>	

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
19日(木) 巡礼団出発 (p.246)	19日(木) 巡礼団出発 (p.100)	19日(木) 巡礼団出発	19日(木) 巡礼団出発 (p.309-10)	19日(木) 巡礼団出発 (p.630)	19日(木) 巡礼団出 発。Rajab月 の約束を反 故にする (N.p.366/H. p.111)	同年 マフマル巡 行に際して 危険とのこ とで槍騎兵 の参加禁止	
Dhu'l-Oa'da 月1日(月) Muhibb ad-Dīn アレッポの ハナフィー 派カーティ ー職とNāzir al-Jaysh職と Kātib as-Sirr 職を兼務 (p.246)	Dhu'l-Oa'da 月1日(水) Muhibb ad-Dīn アレッポの ハナフィー 派カーティ ー職とNāzir al-Jaysh職と Kātib as-Sirr 職を兼務 (p.100) 7日(日) メッカの アミール Abu'l-Qāsim とカーティ ーAbu'l- Barakātの事 件と巡礼団 (p.100-1)	Dhu'l-Oa'da 月1日(月) Muhibb ad-Dīn アレッポの ハナフィー 派カーティ ー職とNāzir al-Jaysh職と Kātib as-Sirr 職を兼務	Dhu'l-Oa'da 月1日(月) Muhibb ad-Dīn アレッポの ハナフィー 派カーティ ー職とNāzir al-Jaysh職と Kātib as-Sirr 職を兼務 (p.310)	Dhu'l-Oa'da月 1日(月) Muhibb ad-Dīn アレッポの ハナフィー 派カーティ ー職とNāzir al-Jaysh職と Kātib as-Sirr 職を兼務 (p.630)	Dhu'l-Oa'da 月1日(月) Muhibb ad-Dīn アレッポの ハナフィー 派カーティ ー職とNāzir al-Jaysh職と Kātib as-Sirr 職を兼務 (N.p.366/H.p. .111)	同年 Muhibb ad-Dīn アレッポの ハナフィー 派カーティ ー職とNāzir al-Jaysh職と Kātib as-Sirr 職を兼務 7日(日) 左の項目に 注記してジ エッダの商 人Badr ad- Dīn Hasan aq-Tābirと巡 礼のアミール Tamarbayに ついての伝 記情報。特 に後者につ いて著者の 父との関係	7日(日) メッカの アミール Abu'l-Qāsim とカーティ ーAbu'l- Barakātの事 件と巡礼団
Dhu'l-Hijja月 メッカで天 候不順。新 月観測の困 難さ(p.247)	Dhu'l-Hijja 月1日(水) メッカで天 候不順。新 月観測の困 難さ(p.101- 2)	Dhu'l-Hijja 月1日 (木)(カイロ で水曜日) メッカで天 候不順。新 月観測の困 難さ	Dhu'l-Hijja 月 (Dhu'l-Qa'da 月としてい るが、校訂 者が訂正) 16日(木) ブハイラ遠 征軍出発。 (p.311)	Dhu'l-Hijja月 16日(木) ブハイラ遠 征軍出発。 (p.631)	Dhu'l-Hijja 月1日(水) (H.p.112) 16日(木) ブハイラ遠 征軍出発 (N.p.367/H.p. .112)	Dhu'l-Hijja 月 右記の情報 の提供者で あるメッカ のカーティ ーについての 伝記情報 (署名なし) 16日 ブハイラ遠 征軍出発	Dhu'l-Hijja 月1日(木) メッカで天 候不順。新 月観測の困 難さ。 (H.p.224- 5/C.p.227-8)

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
	21日(火) ムラトII世 の使節、捕 虜を連れて カイロに到 着(p.98-100) <K>		(Dhūl-Qaʿda 月としてい るが、校訂 者が訂正) 22日(火) ムラトII世 の使節、捕 虜を連れて カイロに到 着(p.311-2) <K>	21日(火) ムラトI世の 使節、捕虜 を連れてカ イロに到着 (p.631) <K>	21日(火) ムラトII世 の使節、捕 虜を連れて カイロに到 着(H.p.112) <K>	同年 年少の著者 はマラティ ーアで胸に 刺し傷を負 った	
	25日(土) 巡礼団の報 告者がカイ ロに戻る。 メッカの状 況報告 (p.102)	25日(土) 巡礼団の報 告者がカイ ロに戻る。 メッカの状 況報告。 著者の父の 巡礼。				25日(土) 巡礼団の報 告者がカイ ロに戻る。 メッカの状 況報告。 著者の父の 巡礼。	25日(土) 巡礼団の報 告者がカイ ロに戻り、 メッカの状 況報告 (H.p.226/C.p. 228)
		26日(日) ブハイラ遠 征軍出発					
同月 Shams ad-Dīn al-Gharrayānī 事件 (vol.2 p.746- 7)<L>	下旬 Shams ad- Dīn al- Gharrayānī事 件(p.102- 3)<L>	月末 Shams ad- Dīn al- Farayānī事 件 <L>				月末 Shams ad- Dīn al- Farayānī事 件、その順 末、当時著 者と父は タラーブル スに居住 <L>	月末 Shams ad- Dīn al- Farayānī事 件 (H.p.226- 8/C.p.228- 9, al- Gharrayānī と)<L>
	同年 Muṭāwāʿa集 団事件 (p.103-5)	同年 al-Burḥān as- Sūsīがメッ カらas-Sirāj al-Humṣīが タラーブル スからカイ ロに到着。					

表2 傳記情報の比較

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. Ibrāhīm b. Maḥmūd				p.105	vol.1 p.170						
2. Abu Bakr b. Yusuf	(C) H- 847 年		847年 (N)44a (M)44a- 45a	847年 p.78	847年 vol.11 p.26- 7	847年 (W) vol.2 p.591 (DH) p.643		847年 vol.9 p.379	847年 p.613- 5	847年 (N) p.501/ (H) p.100	847年 p.238
3. Aḥmad b. ʿAlī b. Aḥmad				p.105- 6	vol.2 p.12-3						
4. Aḥmad b. ʿAlī b. Muḥammad				p.106	vol.2 p.33						
5. Aḥmad b. Muḥammad	(H) (C)	1	(N)47a (M) 112a	p.106- 7	vol.2 p.69 -70	(W) vol.2 p.598 (DH) p.649		vol.9 p.381 -2			
6. Tajār ibn al- Muḥammad				p.107	vol.12 p.16						
7. Tīmraz al-Muʿayyadī		2	(N)46b (M) 243a	p.107- 8	vol.3 p.38						p.242
8. Jamāz b. Miṭṭāḥ				p.108	vol.3 p.78						
9. Ḥasan b. Qirād				p.108	vol.3 p.121						
10. Ḥasan al-Kāzīrūnī				p.108	vol.3 p.161 849年						
11. Ḥamza b. ʿUthmān Qarāyalik	(H) (C)	3	(N)48a	p.108	vol.3 p.165	(W) vol.2 p.599 (DH) p.651	p.313		p.644	(N) p.508 (H) p.115	
12. Saʿīd al-Balīnī				p.108	vol.3 p.256						
13. Sunqur		4	(N)48b	p.108	vol.3 p.273						p.245

14. Sūdūn an-Nawrūzī		5	(N) 46b- 47a	847年 848年 両年 にな し	847年 「と思 われる」 vol.3, p.287	847 年 848 年両 年にな し				847年 「と 考えら れる」 (D) 1/335 (M) 6/ 172-3	
15. (Tūkh al-Abūbakrī)	(H) (C)	(6) 849 年 没	(N)50b	p.129 849年 没	vol.4 p.10 848年 あるい は849 年没	(W) vol.2 p.606 849 年没 (DH) p.656 849 年没				848年 没 (H)11 6 (N)50 8 (M) 7/14 849年 没 (D) 1/371	849年 没 p.242
16. (Tūghān)		849 年 にも なし	(7) 849 年 没	849年 没 p.129							
17. ʿAbd Allāh b. Abī Bakr				p.108	vol.5 p.15-6						
18. ʿAbd Allāh b. ʿAlī				p.108	vol.5 p.35						
19. ʿAbd Allāh az-Zarī		8	(N)50b	p.108	vol.5 p.76						p.245
20. ʿAbd ar-Rahīm b. Abī Bakr 下記35参照	(H) (C)	9	(N)49b	p.108- 9	vol.4 p.170	(W) vol.2 p.598 (DH) p.650		vol.9 p.382	p.632	(N) p.506 (H) p.113	p.246
21. ʿAbd al-Ghannī b. ʿAbd Allāh				p.109	vol.4 p.251						
22. ʿAbd al-Karīm b. Ibrāhīm				p.109	vol.4 p.306						
23. ʿAbd al-Muhsin al-Baghdādī		10	(N)46a	p.109	vol.5 p.79						
24. ʿUthmān b. Abī Bakr				p.109	vol.5 p.127						

25. ʿUlba b. Muḥammad				p.109 -10							
26. ʿAlī b. Yūsuf				p.110	vol.6 p.52						
27. Fayrūz at-Ṭawāshī	(H) (C)	11	(N)48a	p.110	vol.6 p.176	(W) vol.2 p.599 -600 (DH) p.651	p.313		p.633	(D) 2/523 (M) 4/348 (N) 506-8 (H) 114-5	p.244
28. Muḥammad b. Aḥmad b. Baṭīkh				p.110							
29. Muḥammad b. Aḥmad b. ʿUmar	(H) (C)	12	(N)48a	p.110 -2	vol.7 p.28-30	(W) vol.2 p.598 (DH) p.648		vol.9 p.382		(D) 2/592	p.244
30. Muḥammad b. Abī Saʿd				p.112							
31. Muḥammad b. ʿAbd Allāh		13		p.112	vol.8 p.159						
32. Muḥammad b. ʿAbd ar-Raḥmān	(C)	14		p.112							
33. Muḥammad b. ʿAlī b. Abī Bakr b. ʿAlī b. Yūsuf		15									
34. Muḥammad b. ʿAlī b. Abī Bakr b. Muḥammad	(C)	16	(N)47 b	p.112 -3	vol.8 p.173	(W) vol.2 p.599 (DH) p.650		vol.9 p.383			p.243
35. Muḥammad (b. ʿAlī al-Ḥamawī) 上記20参照	(C)						p.312 -3			(N) p.506 (H) p.113	
36. Muḥammad b. Muḥammad b. Abī Bakr				p.113	vol.9 p.67						
37. Muḥammad b. Yahyā b. Aḥmad		17	(N)47a	p.113 -4	vol.10 p.71 -2	(W) vol.2 p.596 -7 (DH) p.648					p.242

表3 3種類の Inbā' と ar-Rawḍ の傳記情報の比較

Inbā' (Hayderabad)	Inbā' (Cairo)	Inbā' (Topkapi)	ar-Rawḍ
	Abū Bakr b. Yūsuf		
Aḥmad b. (Muḥammad b. Ibrāhīm)	Aḥmad b. (Muḥammad b. Ibrāhīm)	Aḥmad b. Ismā'il (本文中)	1. Aḥmad b. Muḥammad b. Ibrāhīm
			2. Timrāz al-Mu'ayyadi
Ḥamza b. 'Uthmān Qarāyalik	Ḥamza b. 'Uthmān Qarāyalik	Ḥamza b. 'Uthmān Qarāyalik (余白に無署名の書き込み)	3. Ḥamza b. 'Uthmān Qarāyalik
			4. Sunqur
		Sūdūn an-Nawrūzī (余白に無署名の書き込み)	5. Sūdūn an-Nawrūzī
Tūkh al-Abūbakrī	Tūkh al-Abūbakrī	Tūkh al-Abūbakrī (余白に無署名の書き込み)	6. (Tūkh al-Abūbakrī)
			7. (Tūghān)
			8. 'Abd Allāh az-Zarfī
'Abd ar-Raḥīm b. 'Alī al-Ḥamawī, Zayn ad-Dīn	'Abd ar-Raḥīm b. 'Alī al-Ḥamawī, Zayn ad-Dīn	'Abd ar-Raḥīm b. 'Alī al-Ḥamawī, Naṣir ad-Dīn (本文にあって、余白に署名がある書き込み)	9. 'Abd ar-Raḥīm b. <u>Abū Bakr</u> , Zayn ad-Dīn
			10. 'Abd al-Muḥsin al-Baghdādī
Fayrūz aṭ-Ṭawāshī	Fayrūz aṭ-Ṭawāshī	Fayrūz aṭ-Ṭawāshī (余白に無署名と署名がある書き込み)	11. Fayrūz aṭ-Ṭawāshī
Muḥammad b. Aḥmad b. Kumayl	Muḥammad b. Aḥmad b. 'Umar b. Kumayl	Muḥammad b. Aḥmad b. Kumayl (本文にあって、余白に無署名の書き込み)	12. Muḥammad b. Aḥmad b. 'Umar b. Kumayl
			13. Muḥammad b. 'Abd Allāh
	Muḥammad b. 'Abd ar-Raḥmān	Muḥammad b. 'Abd ar-Raḥmān (余白に無署名の書き込み)	14. Muḥammad b. 'Abd ar-Raḥmān
			15. Muḥammad b. 'Alī b. <u>Abū Bakr</u> b. 'Alī b. Yūsuf

	Muhammad b. 'Alī b. Abī Bakr b. Muḥammad	Muḥammad b. 'Alī b. Abī Bakr b. Muḥammad (余白に無署名の書き込み)	16. Muḥammad b. 'Alī b. Abī Bakr b. Muḥammad
	Muḥammad (b. 'Alī al- Ḥamawī), Shams ad-Dīn	Muḥammad al-Ḥamawī, Shams ad-Dīn (余白に2種類の無署名の書き込み)	
		Muḥammad b. Zahra (本文の終わり、最終 行の余白から欄外の 余白にわたる無署名 の書き込み)	17. Muḥammad b. Yahyā b. Aḥmad b. Aḥmad b. Dafa b. Zahra
			18. Yūsuf b. Khaṭīb b. Shāhīn
			19. Yūsuf b. Muḥammad

1 Ibn Hajar al-'Asqalanī, *Inbā' al-Ghumr bi-Anbā' al-'Umr*, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, III Ahmet, 2941/2, fol. 193b.



seemed to serve as an attractive model for the youthful intelligentsia of China. The family, composed of a nuclear family freed from the bonds of the extended family, with a husband working industriously at a job, which provided a steady income, and the wife firmly managing the household, was accepted with enthusiasm. However, those who actually established such families were but an extreme minority; the vast majority expected that the wife too would find work and bring home an income.

The dawning of the age of wage-labor in China made the reality of just who brought how much income into the household clear to one and all. Chinese men and women reacted sharply to this phenomenon. The income or the lack thereof provided by each family member was seen as the determiner of family authority.

Only when middle-class women approached working women in a China that had been unable to accept either the Japanese-constructed image of good wife and wise mother or the Christian image of the mother and wife was an image of the family based on norms of a broader social class born. It was in this fashion that by the second half of the decade of the twenties, both men and women had come to value the notion of securing an income through wage labor as part of the image of the ideal family of the youthful intelligentsia, and the influence of the working-class households deeply imbued the image of the family of the intellectuals.

**ON THE PROCESS OF CREATING A HISTORY DURING
THE MAMLŪK PERIOD IN THE LATE-FIFTEENTH
CENTURY—THROUGH AN EXAMINATION OF ‘ABD
AL-BĀSIT AL-ḤANAFĪ’S DESCRIPTION OF THE
YEAR 848 A.H. (APRIL 20, 1444 TO APRIL 8, 1445 C.E.)**

KIKUCHI Tadayoshi

Many historians appeared during the later Mamlūk period and they have left us various works. However, critical evaluations of these works and a consideration of the interrelationship of the works has not been clarified to this point due in part to limitations on access to sources.

In this article, I examine the process of creation of the *ar-Rawḍ al Bāsim fī Ḥawādith al-‘Umr wa-t-Tarājim* (Vatican Arabo, 728, 729), a history written by ‘Abd al-Bāsiṭ al Ḥanafī (844—920 A. H./1440—1514 C. E.), as part of a study of historiography during the later Mamlūk period and try to clarify his method of description and handling of historical sources by a comparison with other sources.

In addition to his intention to write a continuation of existing works of other historians, ‘Abd al-Bāsiṭ was determined to create a more accurate history by commencing his description from the year of his own birth. He was particularly intent on continuing his master Ibn Ḥajar’s history, *Inbāʾ al-Ghumr bi-Anbāʾ al-‘Umr*, which described events up to the year 850. By comparing two versions of the corrected edition of the *Inbāʾ* with the contents of a manuscript of the *Inbāʾ* preserved in the Topkapi Library (III Ahmet 2941/1 and 2941/2), it can be demonstrated that there are portions found in this manuscript that do not appear in two edited versions. Thus it has become clear that this was the very manuscript of the *Inbāʾ* used by ‘Abd al-Bāsiṭ and the signature ‘Abd al-Bāsiṭ written in the margins is that of the historian himself.

Finally, in addition to examining the marginalia in this manuscript, which may be called “drafts” of the *ar-Rawḍ*, by using the year 848 A. H., which is the sole year in Vatican Arabo, 728 that contains complete sections of both the chronicle of the year and biographies, I have sought to explore the process of the formation of ‘Abd al-Bāsiṭ’s description through its culmination in the description in the *ar-Rawḍ*. I have also employed the *Nayl al-Amal*, which might be termed a summary version of his history, and the *Majmaʾ al-Mufannan*, his directory of names, in order to supplement the many lost portions of the *ar-Rawḍ*.

In addition to copying the related portions of the histories of *Ibn Taghribirdī* and *Al-‘Aynī* in the margins of this manuscript of the *Inbāʾ*, ‘Abd al-Bāsiṭ often added first-hand accounts of events which he himself had collected. At this stage, the framework of the *ar-Rawḍ*, months, day of the month, name of the day, had been established. Returning to research the accounts of *Ibn Taghribirdī* and *Al-‘Aynī*, again, ‘Abd al-Bāsiṭ then used as-Sakhāwī’s history (it can be surmised that this version

contained less information than the currently published *at-Tibr*), and added other materials and accounts that he had collected in the process of sifting information for the descriptions in the *ar-Rawḍ*. It can be said that his personal historical descriptions and detailed narrative description of events are characteristics of the work because his own times were the object of his study. Moreover, having compared the *ar-Rawḍ* to other contemporary histories, I have been able to indicate concretely how ‘Abd al-Bāsiṭ’s manner of description was carried on later by Ibn Iyās, a fact that has not heretofore been illustrated sufficiently.

THE OLD TIBETAN *RU* AND THE THOUSAND DISTRICT

IWAO Kazushi

In Tibet proper during the age of the Tu fan 吐蕃, units of military organization known as *ru*, originally meaning horn and signifying a banner, were instituted across the seventh to the ninth century. Each *ru* included eight *stong sde* (a thousand district), a single *stong bu chung* (a small thousand district), and a single *sku srung gi stong sde* (a thousand district of royal bodyguards). The *ru* formed the basis of Tu fan military strength. As a number of scholars have previously noted, the origin of this organization is thought to be found in the northern nomadic states, and as the high plateaus of Tibet are crisscrossed by mountains and ravines, unlike the grassy plains of the nomadic peoples, it is difficult to imagine that the *ru* was a development solely of the Tu fan. In this article I consider how the *ru* actually functioned in regard to the following two points.

1. The *ru* system as it appears in post Tu fan Tibetan literature.

In Tibetan-language literature there are now known to be five works that contain detailed information on the *ru* system, i. e., the *Blon po bka’ thang*, the *Mkhas pa’i dga’ ston*, the *Me tog phreng ba*, and two versions of the *Lde’u chos ’byung*. They divide the *ru* system into two archetypes, a stable form, composed of eight thousand districts, and an unstable type.